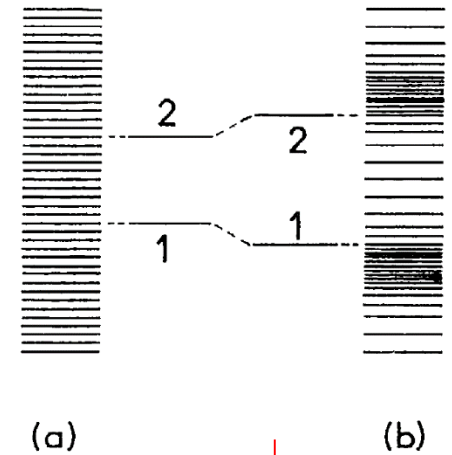
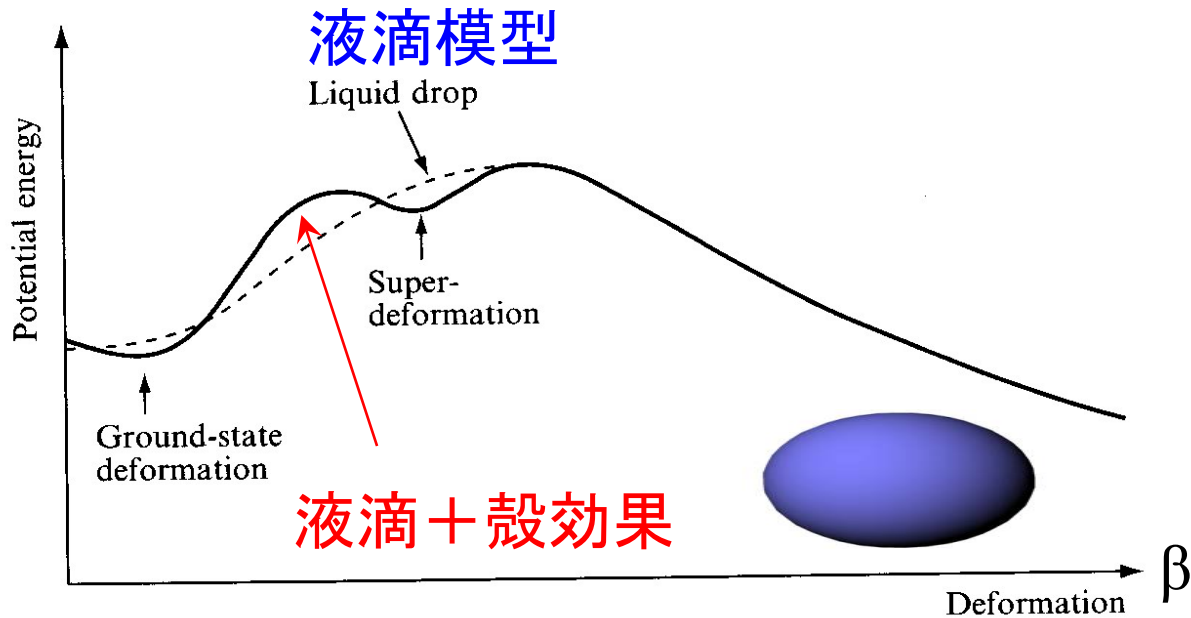


殻構造の帰結：原子核の変形



準位にギャップが開くと原子核が安定になる

$$E(\beta) = E_{LDM}(\beta) + E_{shell}(\beta)$$

原子核が変形

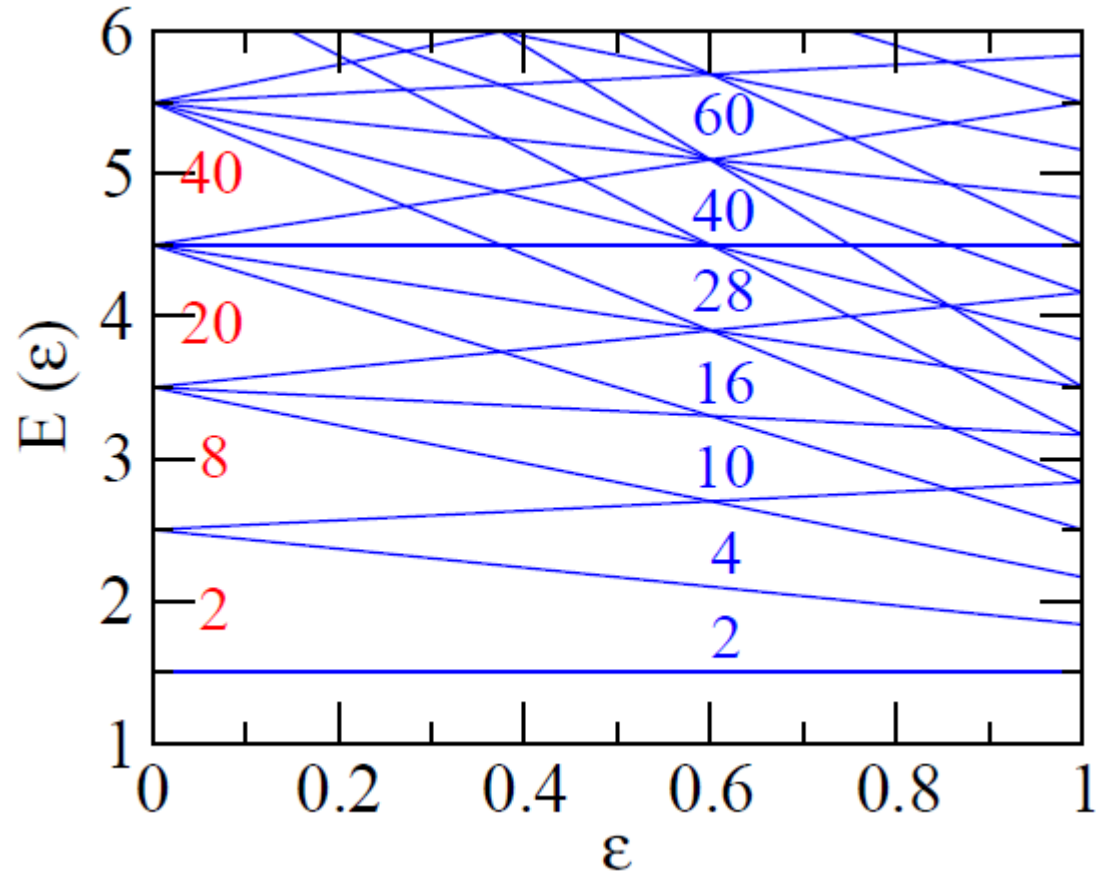
→ 核子が感じるポテンシャルも変形

→ 変形度によって異なる量子力学的補正(殻効果)

例) 3次元調和振動子

$$H = \frac{p^2}{2m} + \frac{1}{2}m\omega_z^2 z^2 + \frac{1}{2}m\omega_{\perp}^2 (x^2 + y^2)$$

$$E = (n_z + \frac{1}{2})\hbar\omega_z + (n_x + n_y + 1)\hbar\omega_{\perp}$$



球形のときとは異なる殻構造



殻補正エネルギーは変形に依存する

$$E(\epsilon) = E_{LDM}(\epsilon) + E_{shell}(\epsilon)$$

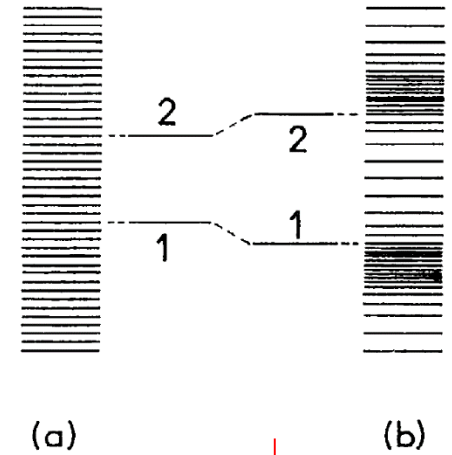
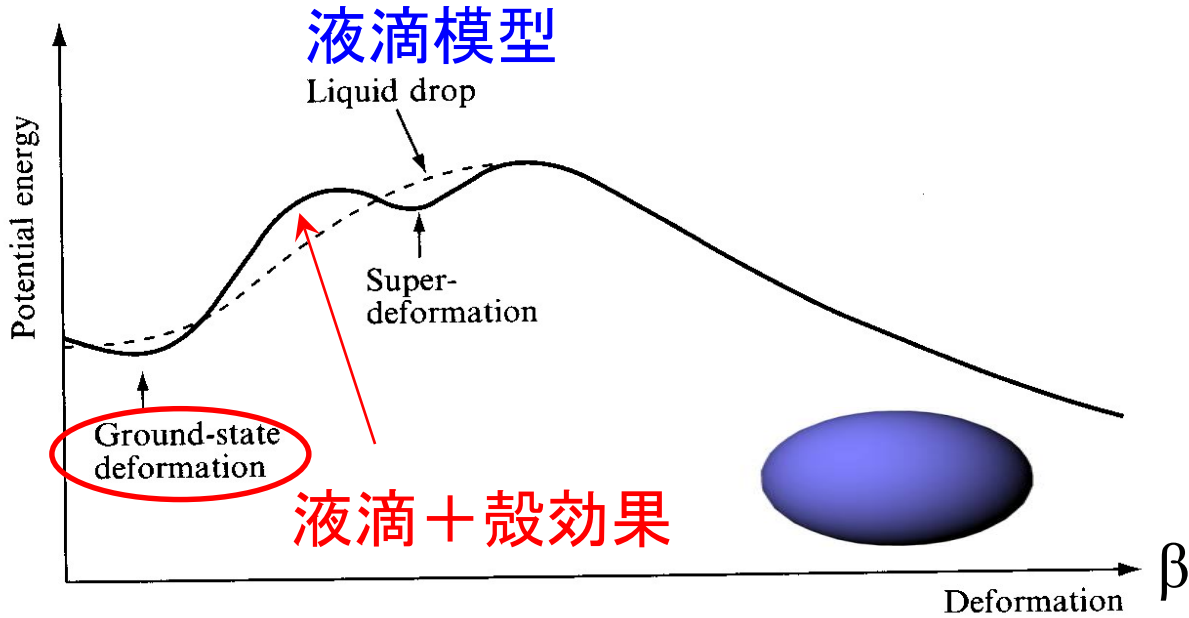


最も安定な ϵ を変え得る (原子核の変形)

$$\omega_{\perp} = \omega_0(1 + \frac{\epsilon}{3})$$

$$\omega_z = \omega_0(1 - \frac{2}{3}\epsilon)$$

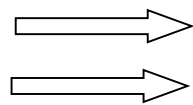
殻構造の帰結：原子核の変形



準位にギャップが開くと原子核が安定になる

$$E(\beta) = E_{LDM}(\beta) + E_{shell}(\beta)$$

液滴模型
殻効果



必ず球形

変形状態が基底状態になる場合あり

→ 実験的証拠はあるか?

原子核の変形の証拠

^{154}Sm の励起スペクトル

0.903 ————— 8^+
(MeV)

0.544 ————— 6^+

0.267 ————— 4^+

0.082 ————— 2^+

0 ————— 0^+

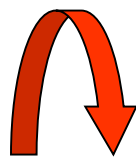
^{154}Sm

$$E_I \sim \frac{I(I+1)\hbar^2}{2\mathcal{J}}$$

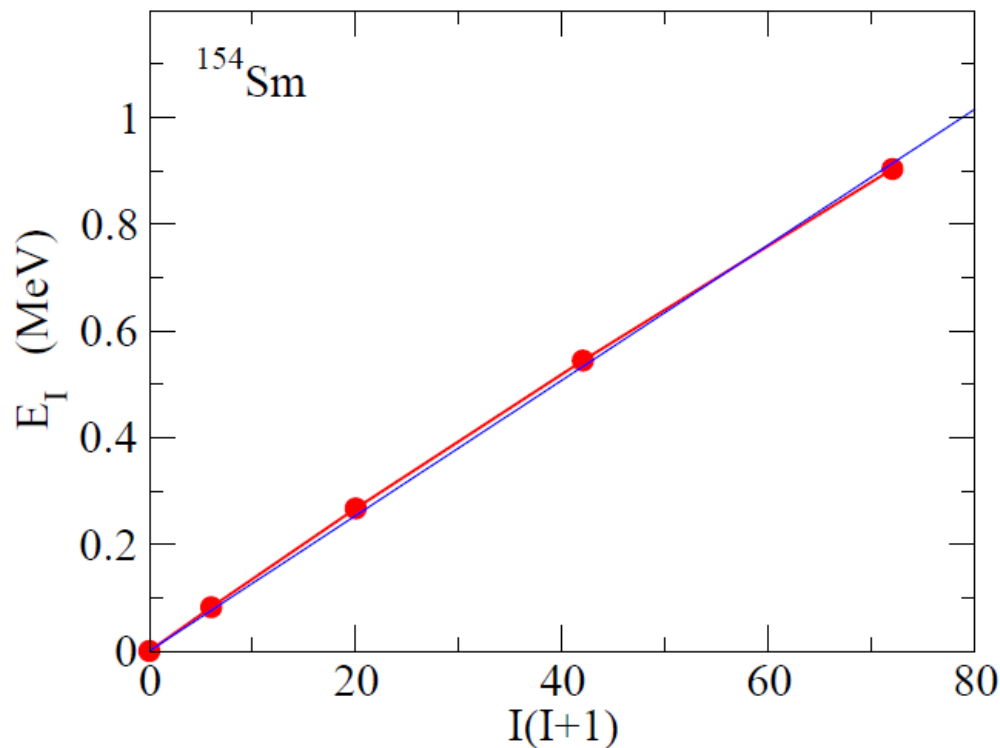
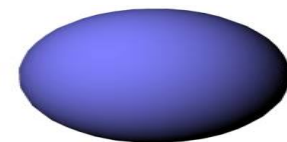
cf. 剛体の回転エネルギー(古典力学)

$$E = \frac{1}{2} \mathcal{J} \omega^2 = \frac{I^2}{2\mathcal{J}}$$

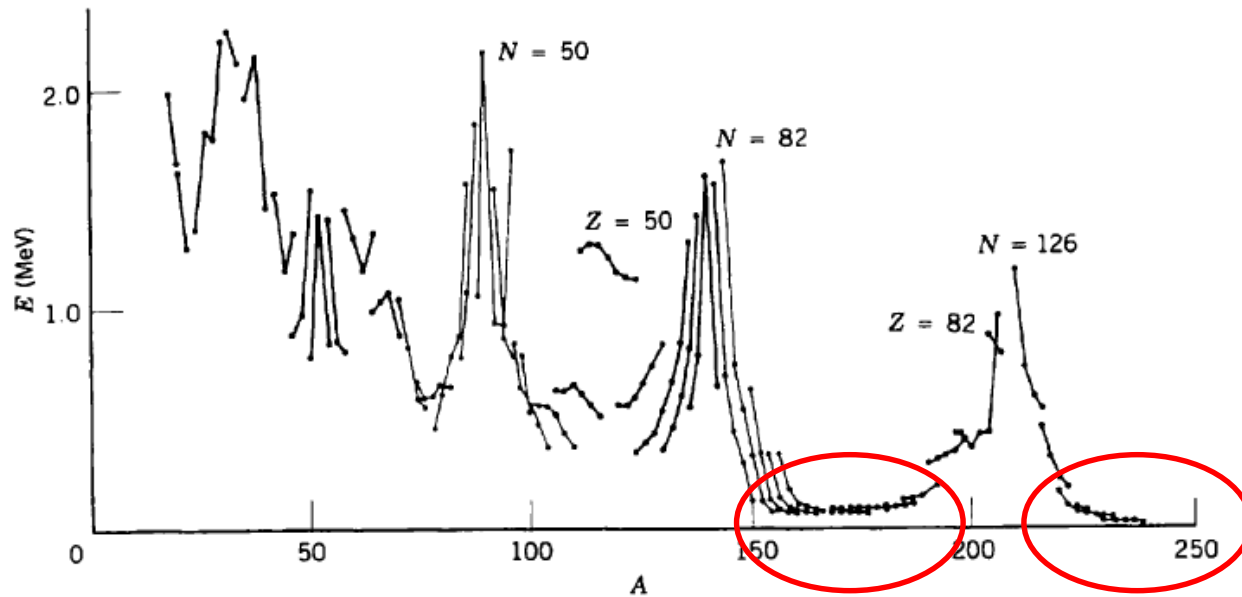
$$(I = \mathcal{J} \omega, \omega = \dot{\theta})$$



^{154}Sm は変形している



偶偶核の 2^+ 状態のエネルギー

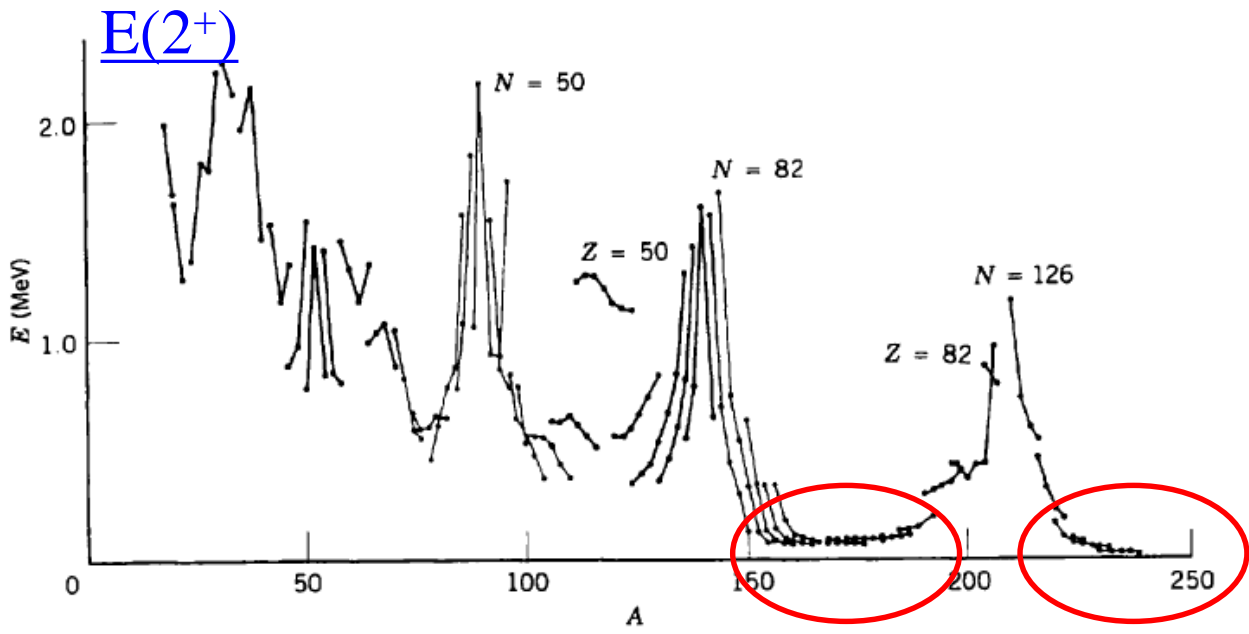


変形核

K.S. Krane, "Introductory Nuclear Physics"

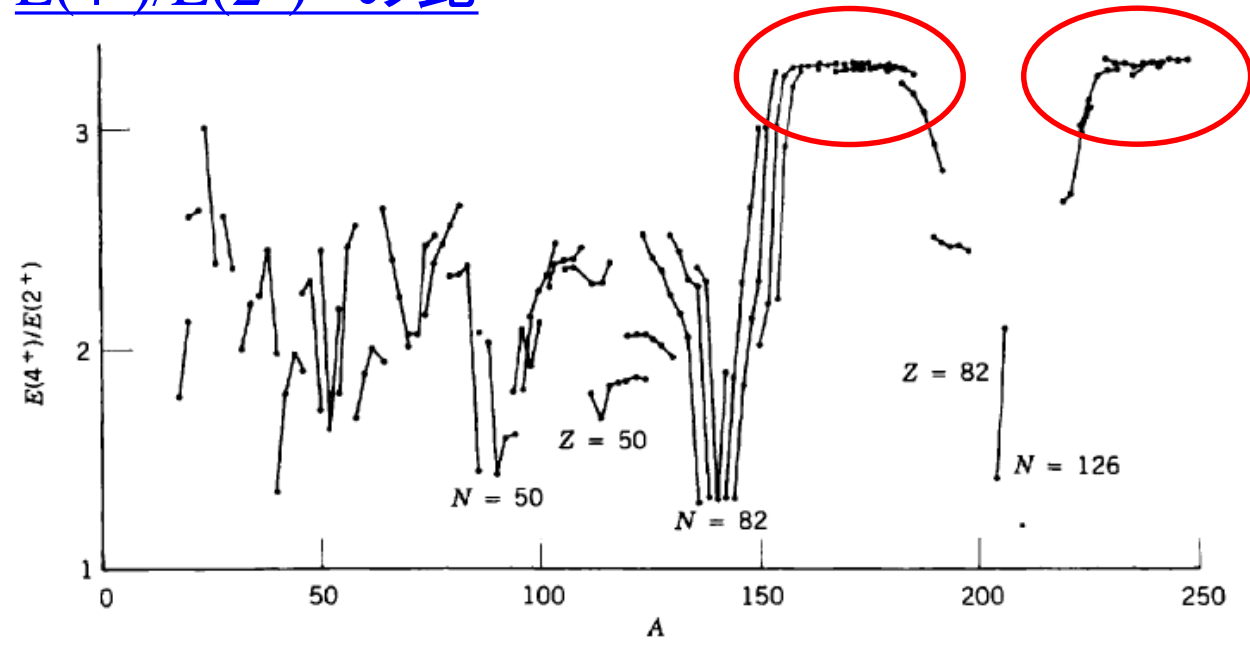
原子核が変形すると励起エネルギーが小さくなる

↔ 原子核の変形: 対称性の自発的破れ
(ゼロ・モードの発生)



変形核

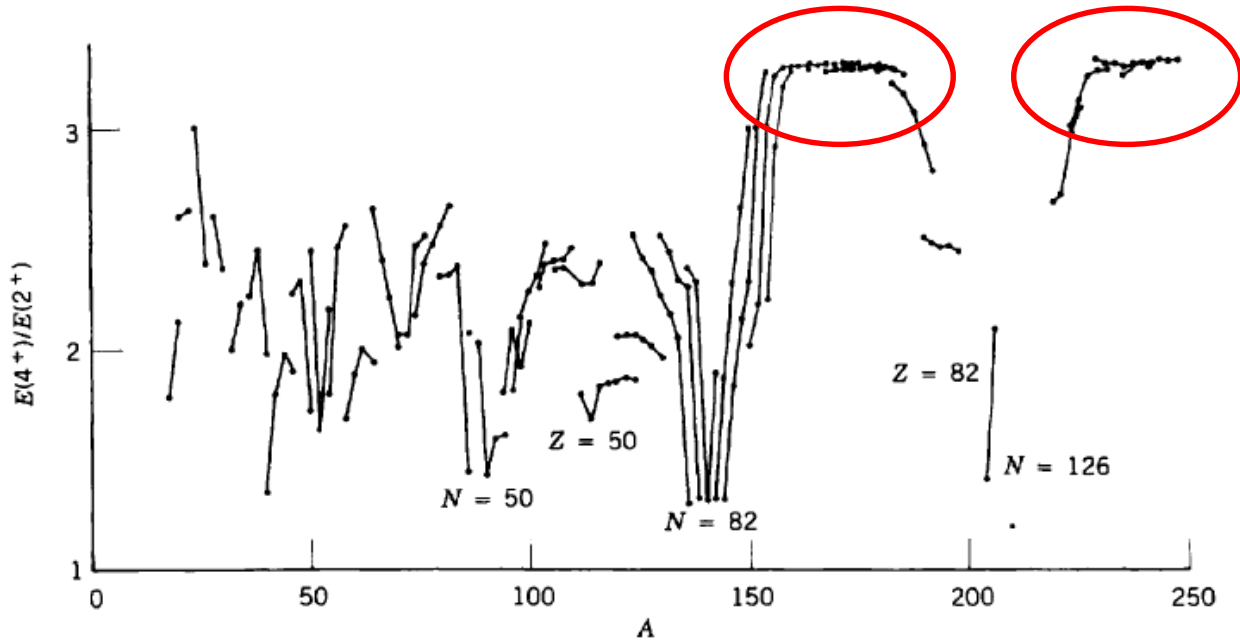
$E(4^+)/E(2^+)$ の比



変形核なら
 $E(4^+)/E(2^+) \sim 3.3$

球形核なら
 $E(4^+)/E(2^+) \sim 2$

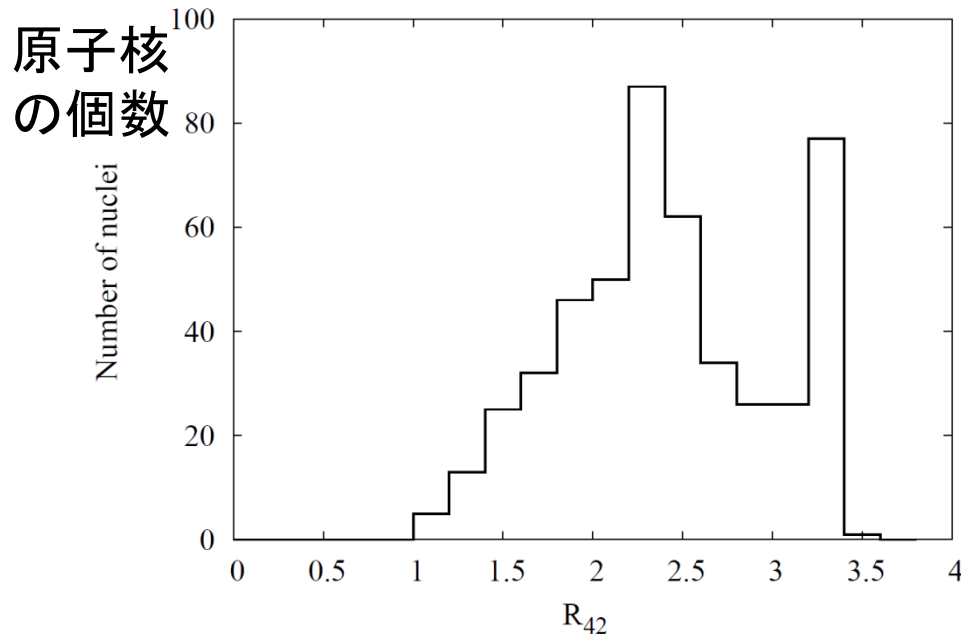
偶偶核における $E(4^+)/E(2^+)$ の比



変形核なら
 $E(4^+)/E(2^+) \sim 3.3$

球形核なら
 $E(4^+)/E(2^+) \sim 2$

K.S. Krane, "Introductory Nuclear Physics"



G.F. Bertsch,
 in "Fifty Years of Nuclear
 BCS", p. 26

偶偶核の 2^+ 状態の四重極モーメント

$$Q = e\sqrt{\frac{16\pi}{5}} \langle \Psi_{II} | r^2 Y_{20} | \Psi_{II} \rangle$$

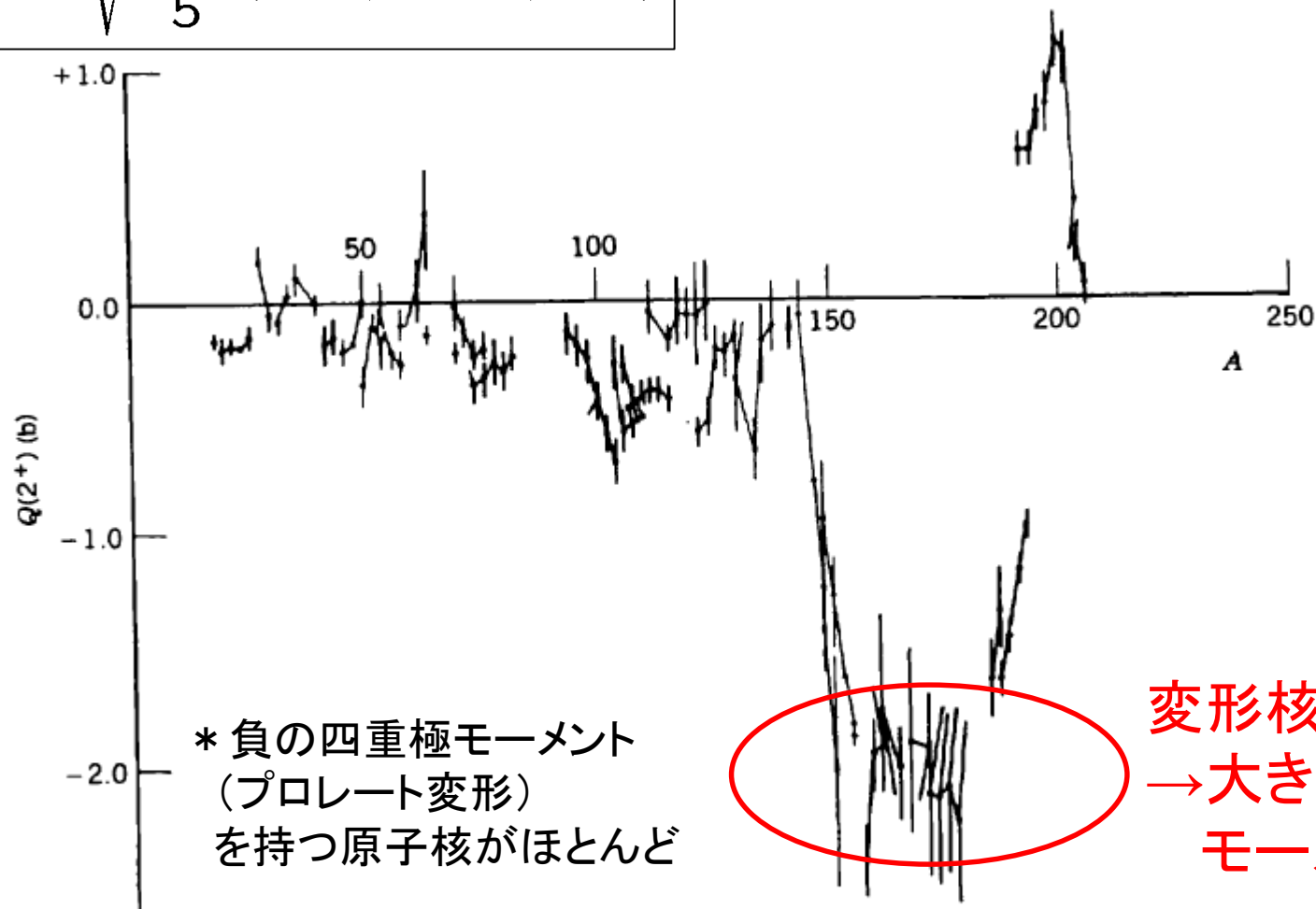


Figure 5.16b Electric quadrupole moments of lowest 2^+ states of even- Z , even- N nuclei. The lines connect sequences of isotopes.

変形核の一粒子準位 (ニルソン・レベル)

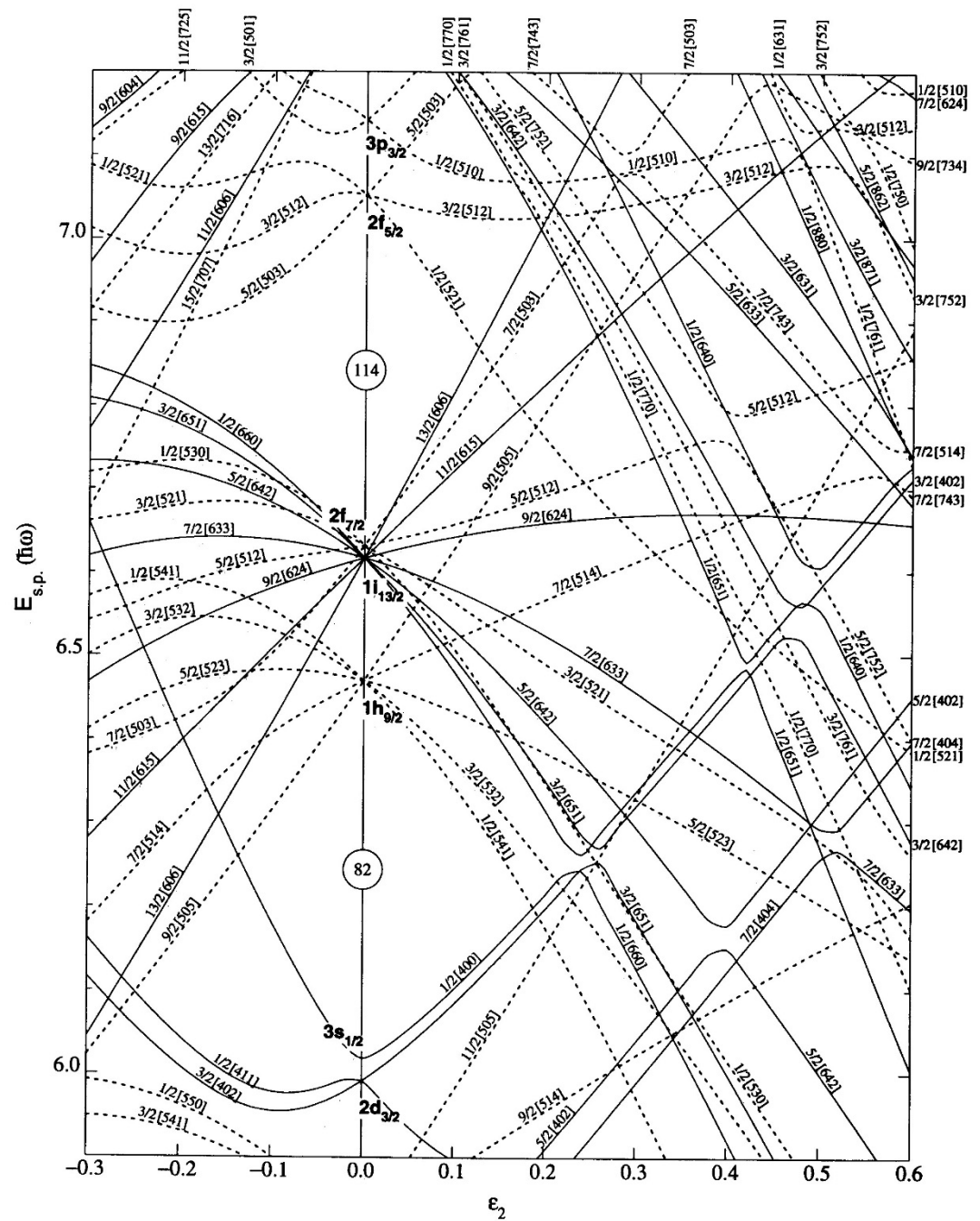
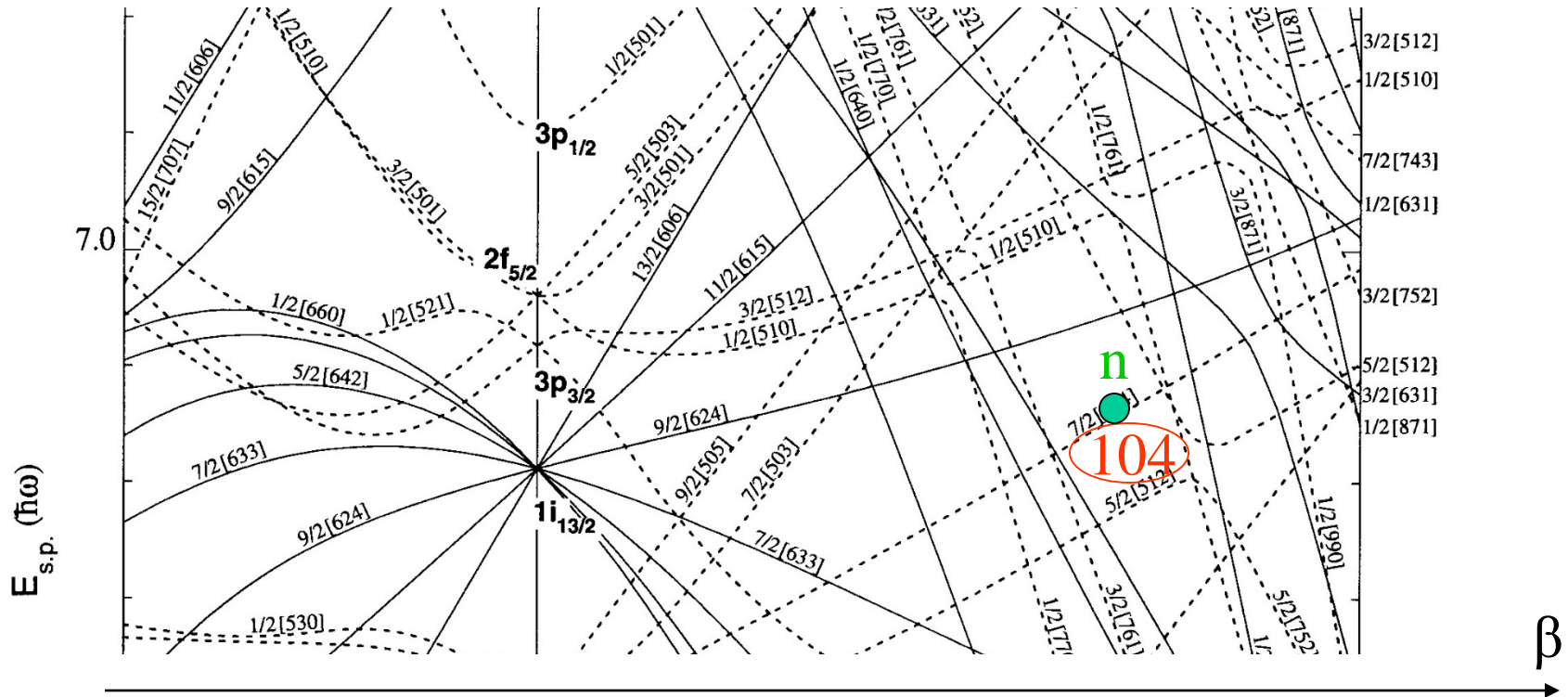


Figure 13. Nilsson diagram for protons, $Z \geq 82$ ($\epsilon_4 = \epsilon_2^2/6$).

変形核の一粒子準位

^{177}Hf のスペクトルが変形を考えると説明可: 変形の証拠



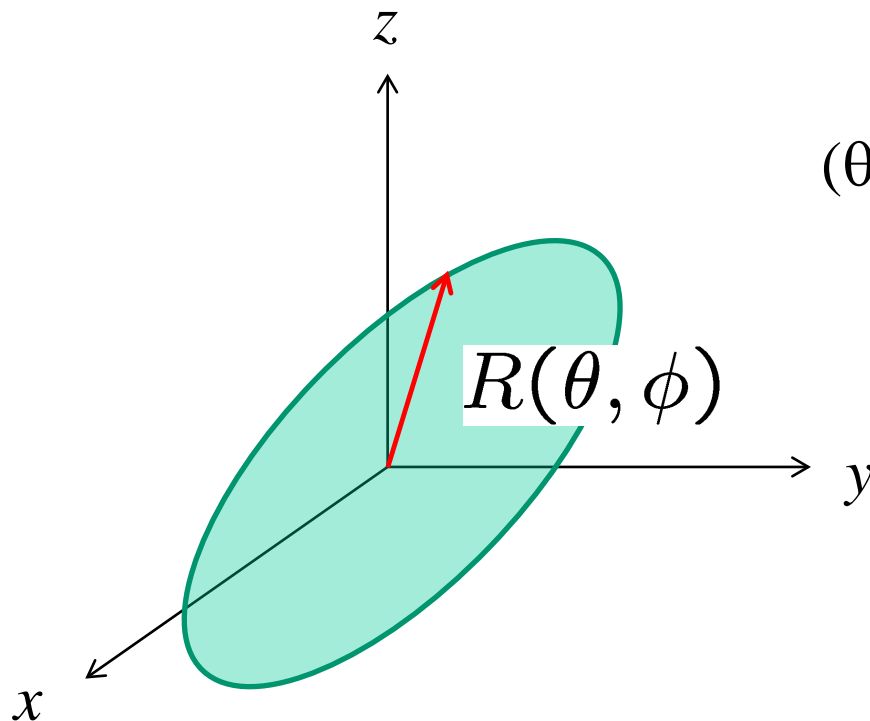
$5/2^-$ ————— 0.508

$9/2^+$ ————— 0.321

$7/2^-$ ————— 0

$^{177}_{72}\text{Hf}_{105}$

変形パラメータ



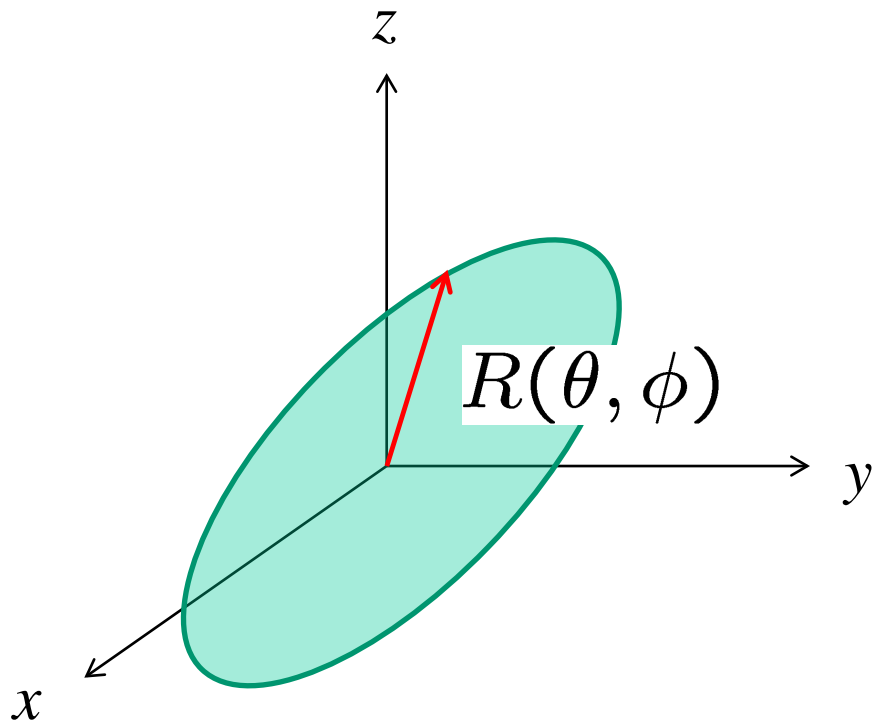
(θ, ϕ) 方向の半径: $R(\theta, \phi)$

任意の関数は球面調和関数で展開できる:

$$R(\theta, \phi) = R_0 \left(1 + \sum_{\lambda, \mu} \alpha_{\lambda\mu} Y_{\lambda\mu}^*(\theta, \phi) \right)$$

$\alpha_{\lambda\mu}$: 変形パラメータ

変形パラメータ



$$R(\theta, \phi) = R_0 \left(1 + \sum_{\lambda, \mu} \alpha_{\lambda\mu} Y_{\lambda\mu}^*(\theta, \phi) \right)$$

最も重要な変形は $\lambda = 2$
(四重極変形)

$\lambda = 0$: R_0 に吸収

$\lambda = 1$: 重心の位置を変えるだけ
(原点を適当にとれば

$\alpha_{1\mu} = 0$ とすることができる)

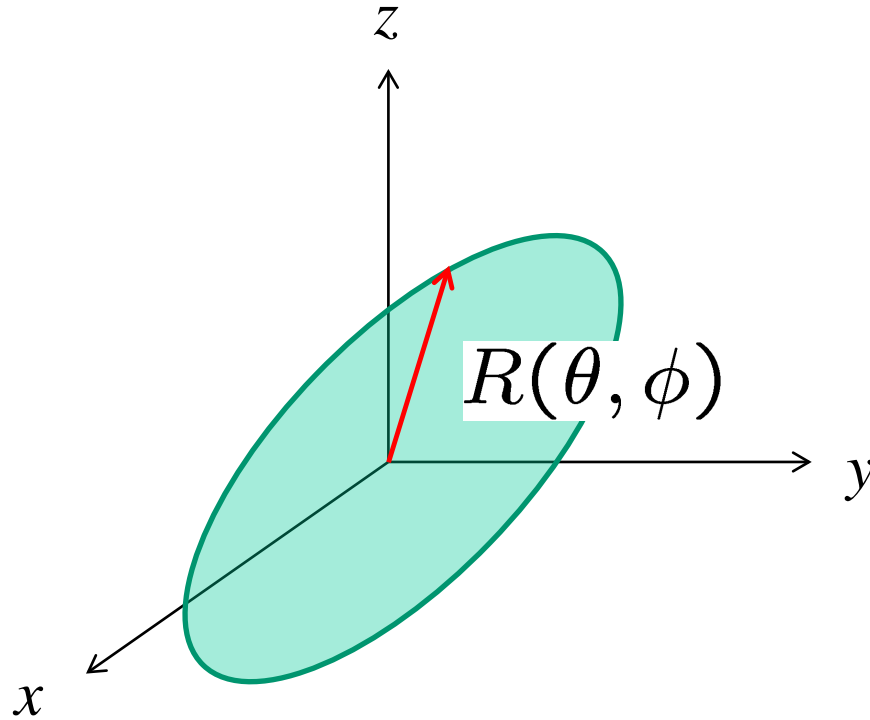
$\lambda = 2$: 楕円体型の変形

以下、 $\lambda = 2$ に話を限定

$$R(\theta, \phi) = R_0 \left(1 + \sum_{\mu} \alpha_{2\mu} Y_{2\mu}^*(\theta, \phi) \right)$$

以下、 $\lambda = 2$ に話を限定 $R(\theta, \phi) = R_0 \left(1 + \sum_{\mu} \alpha_{2\mu} Y_{2\mu}^*(\theta, \phi) \right)$

*この時点で5個の独立なパラメーター： $\alpha_{22} \sim \alpha_{2-2}$



軸をうまく取りなおすことによってより表現が簡単になる

四重極変形の代表的な形はキウイ・フルーツ型



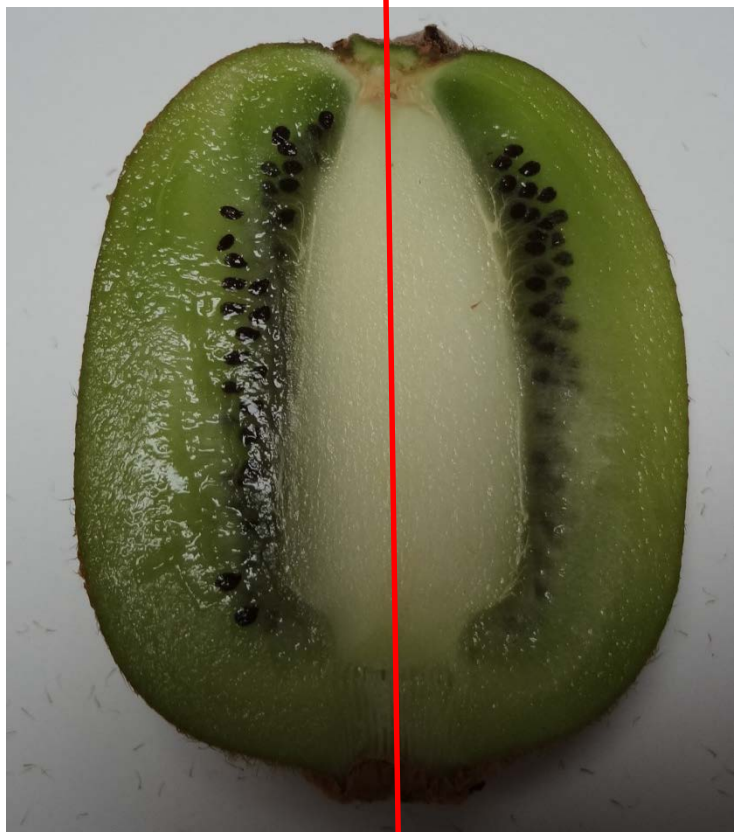
横からみた形



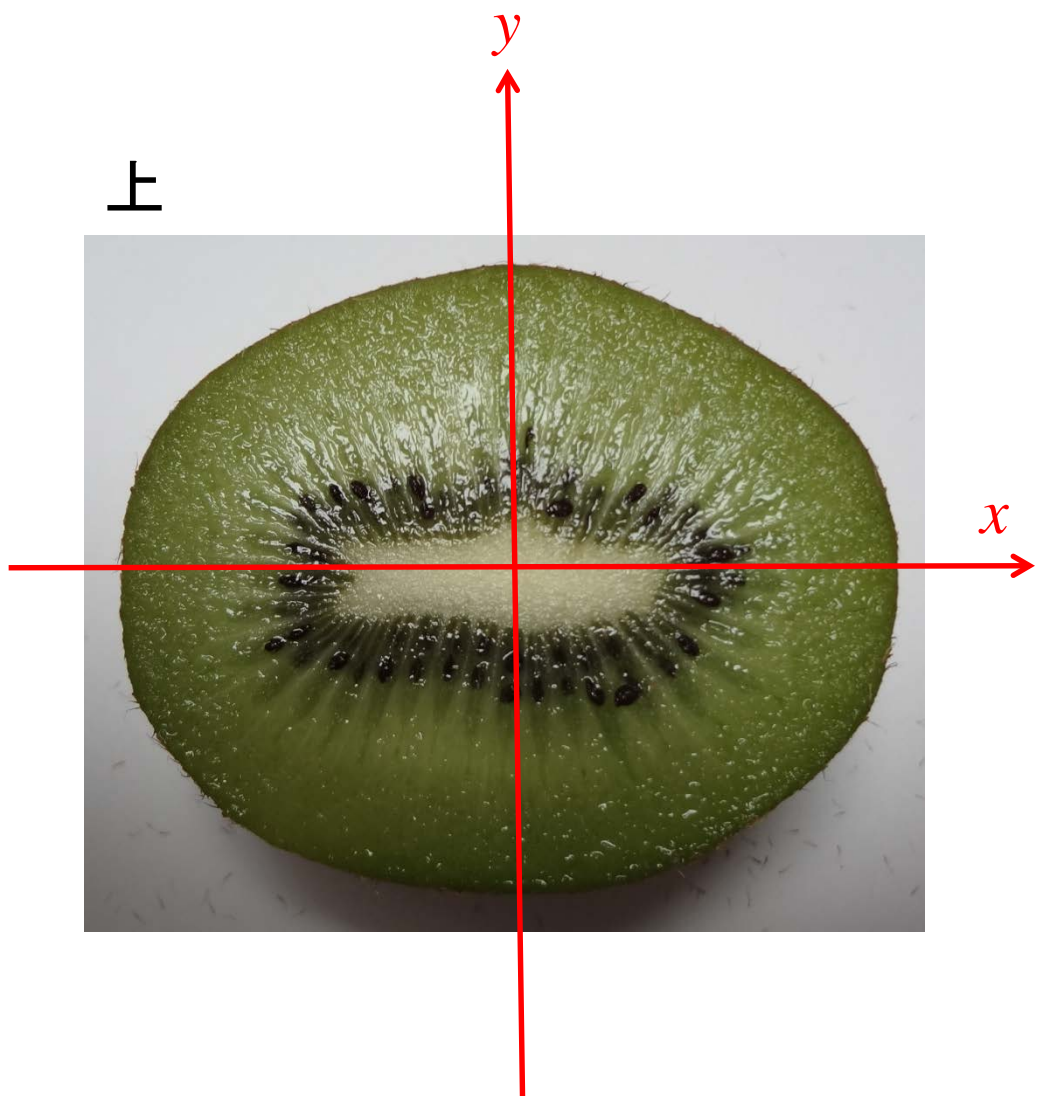
上からみた形



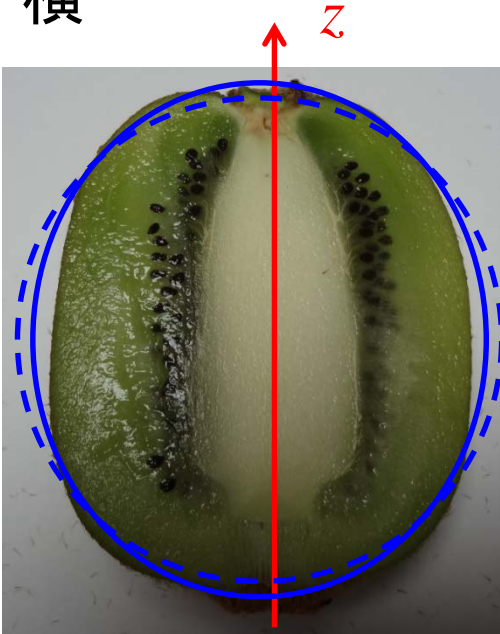
横



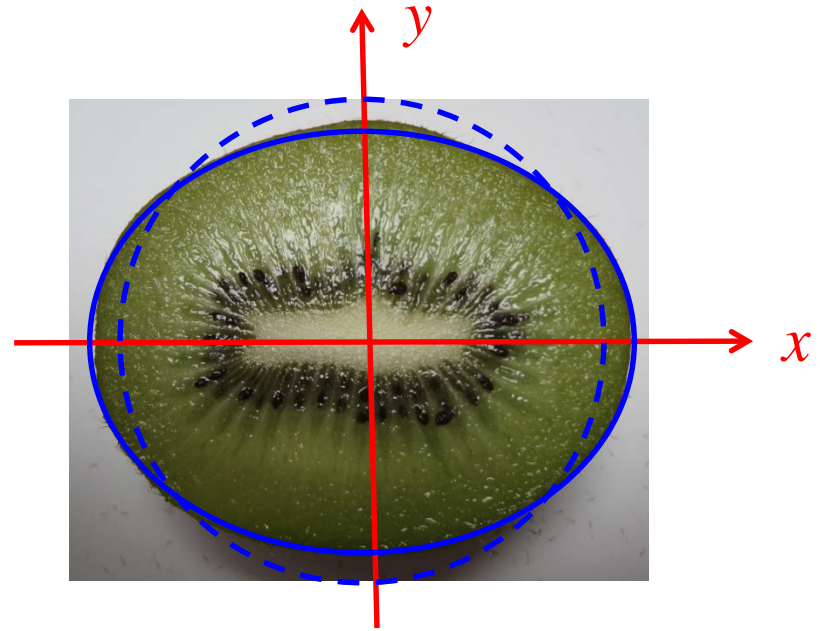
上



横



上



この形は2つのパラメーター(のみ)で記述できる

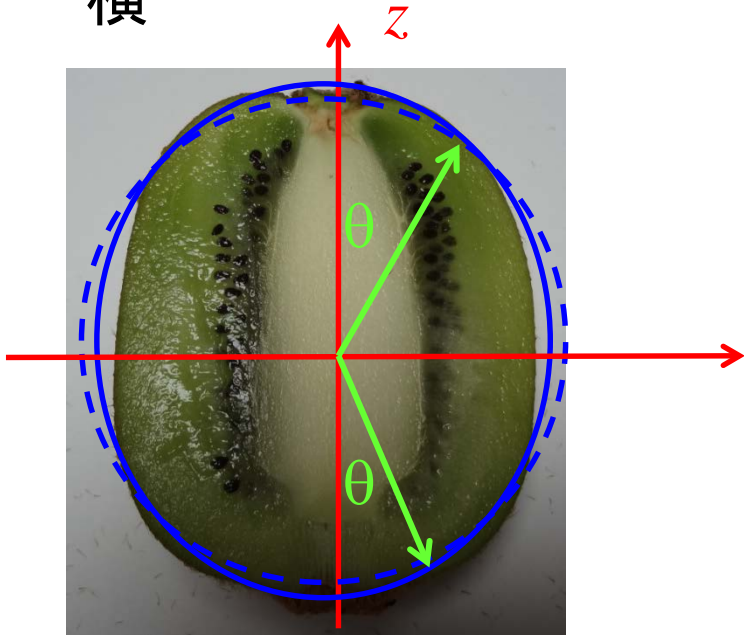
✓「横」から見た時にどのくらい円からずれているか

✓「上」から見た時にどのくらい円からずれているか

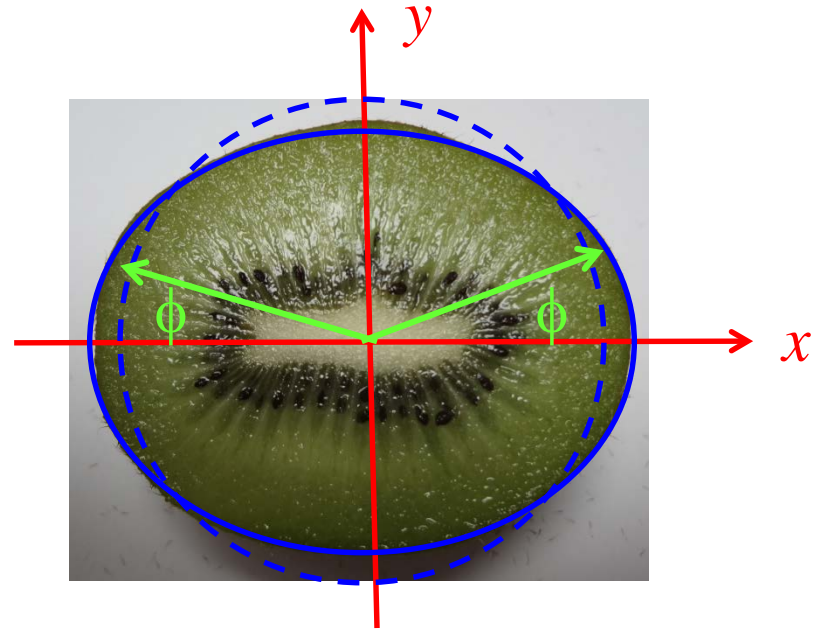
数学的には

$$R(\theta, \phi) = R_0 [1 + a_{20}Y_{20}(\theta) + a_{22}(Y_{22}(\theta, \phi) + Y_{2-2}(\theta, \phi))]$$

横



上



数学的には

$$R(\theta, \phi) = R_0 [1 + a_{20}Y_{20}(\theta) + a_{22}(Y_{22}(\theta, \phi) + Y_{2-2}(\theta, \phi))]$$

このようにとると、

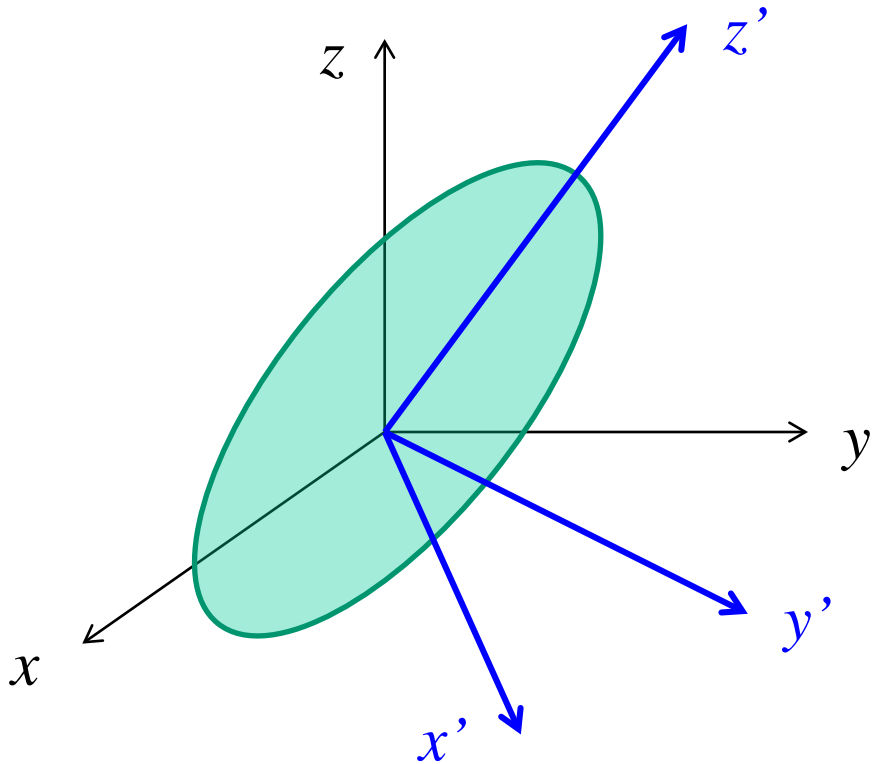
$$R(\theta, \phi) = R(\pi - \theta, \phi)$$

$$R(\theta, \phi) = R(\theta, \pi - \phi)$$

$$R(\theta, \phi) = R_0 \left(1 + \sum_{\mu} \alpha_{2\mu} Y_{2\mu}^*(\theta, \phi) \right)$$

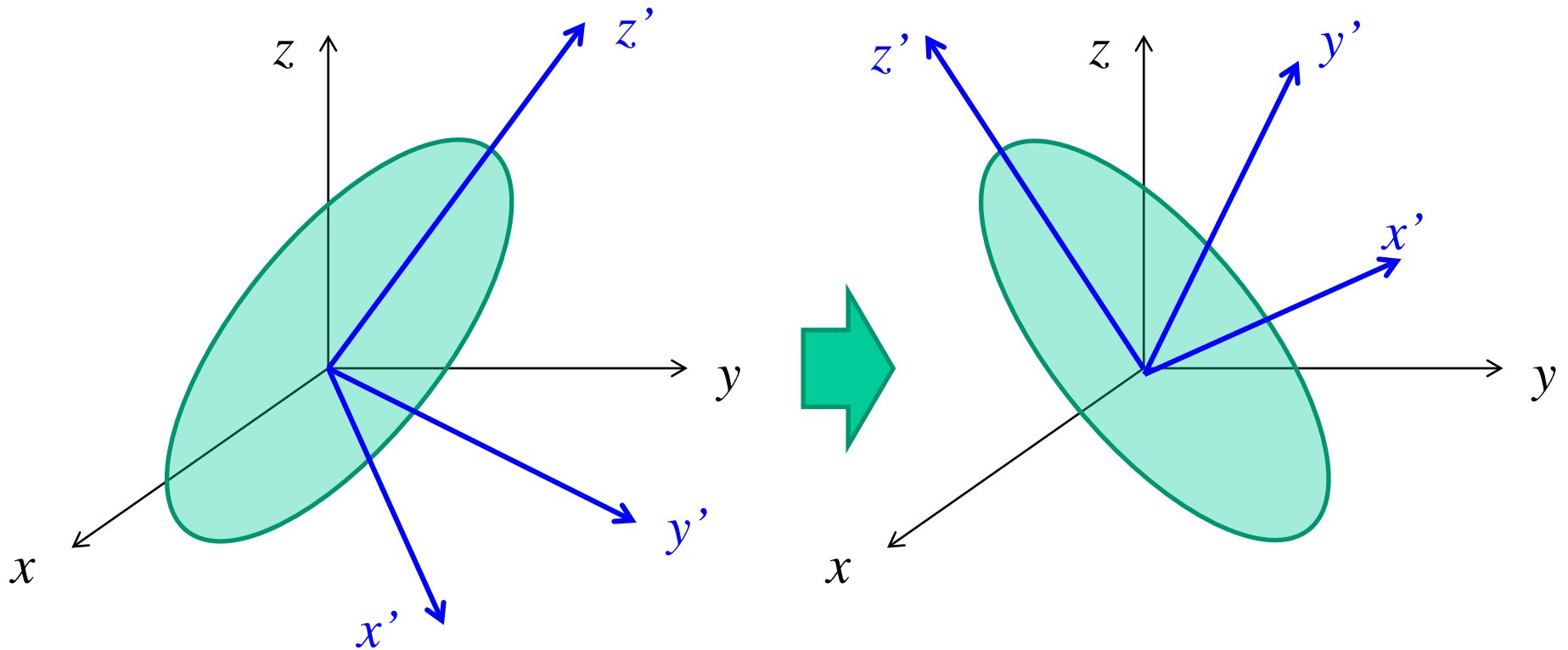
5個の独立なパラメーター:

$$\alpha_{22} \sim \alpha_{2-2}$$



→ 原子核の形状を表すパラメーター2つ: a_{20} , a_{22}
+ 取りなおした軸の方向を表す角度3つ(オイラー角)

原子核が回転すると軸も一緒に回転(物体固定系)
物体固定系から見ると、半径の式 $R(\theta, \phi)$ はいつも同じ



→ 原子核の形状を表すパラメーター2つ: a_{20} , a_{22}
+ 取りなおした軸の方向を表す角度3つ(オイラー角)

$$R(\theta, \phi) = R_0 [1 + a_{20}Y_{20}(\theta) + a_{22}(Y_{22}(\theta, \phi) + Y_{2-2}(\theta, \phi))]$$

$$a_{20} \equiv \beta \cos \gamma, \quad a_{22} \equiv \frac{1}{\sqrt{2}} \beta \sin \gamma$$

とよく書く。

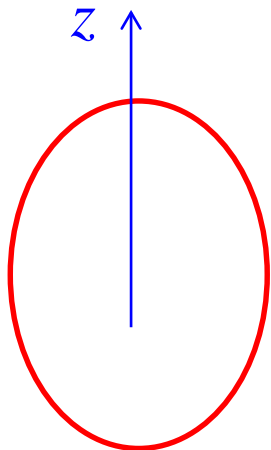
$\gamma = 0$ のとき: $a_{20} = \beta, a_{22} = 0$

$$\hookrightarrow R(\theta, \phi) = R_0 [1 + \beta Y_{20}(\theta)]$$

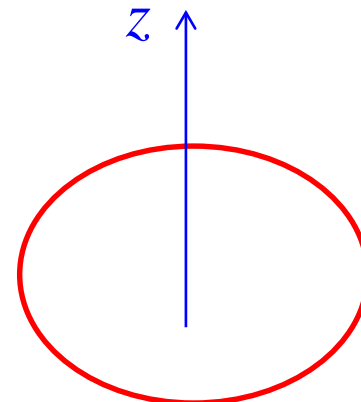
(γ は軸対称性からのずれを表す)



半径は ϕ によらない: z 軸まわりの軸対称(回転楕円体)

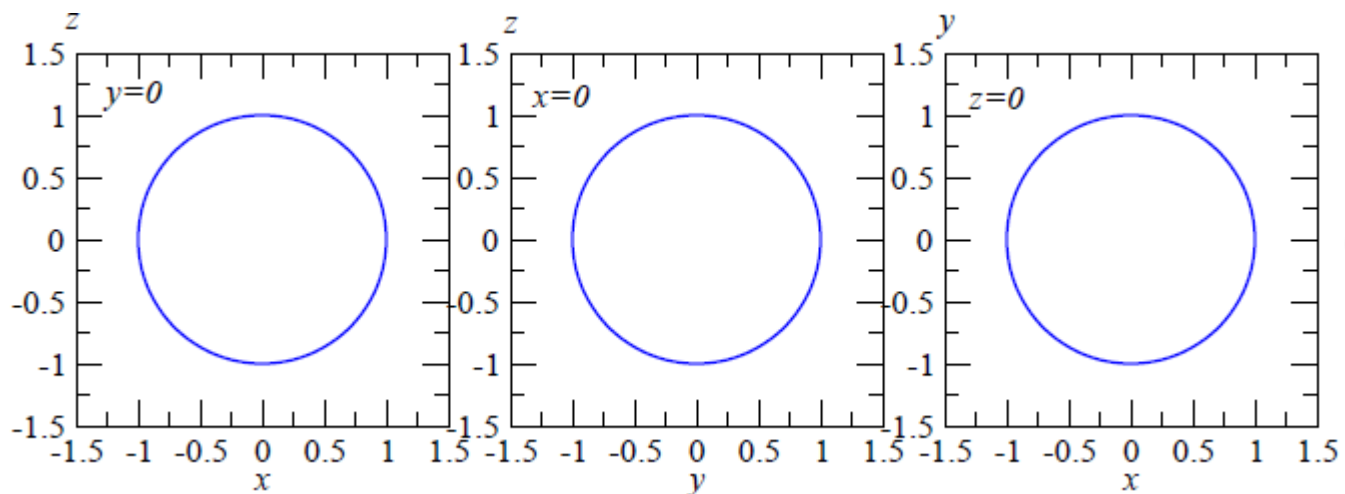


$\beta > 0$
プロレート変形



$\beta < 0$
オブレート変形

$\beta = 0$
(球形)

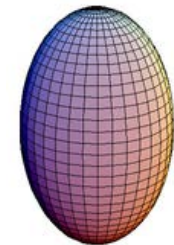
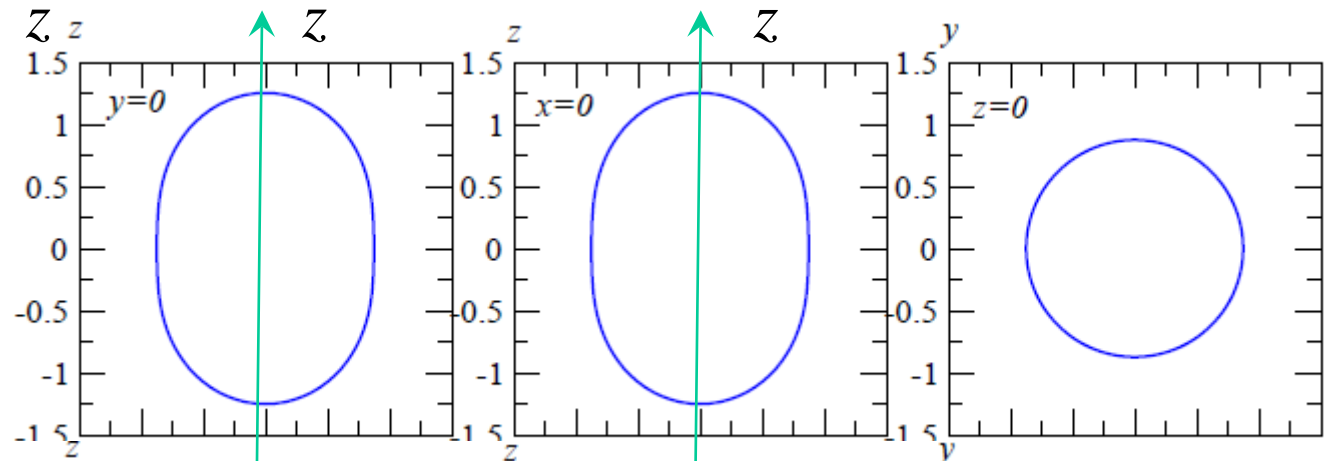


$y = 0$ で
切った平面

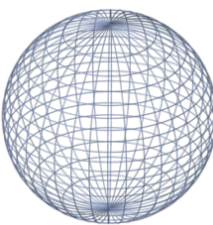
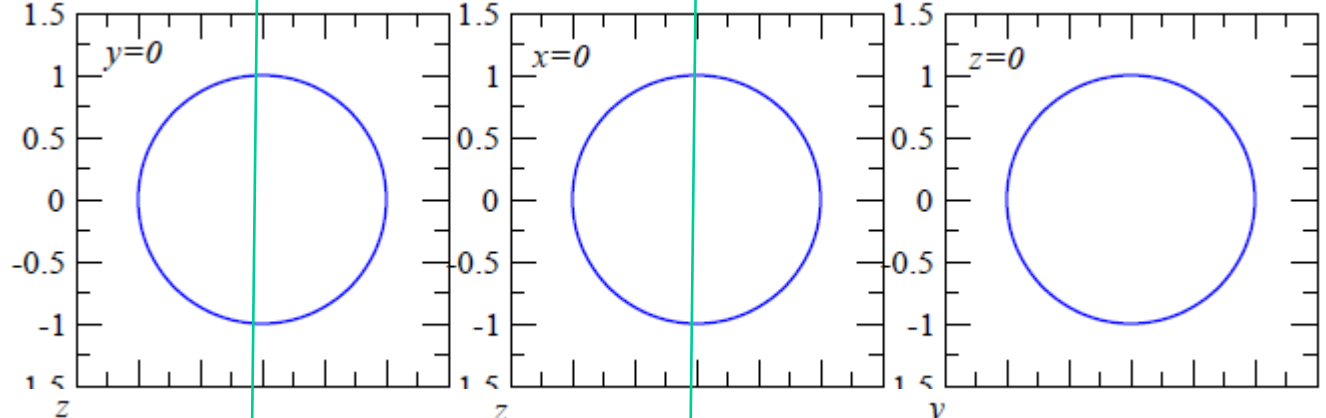
$x = 0$ で
切った平面

$z = 0$ で
切った平面

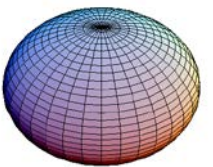
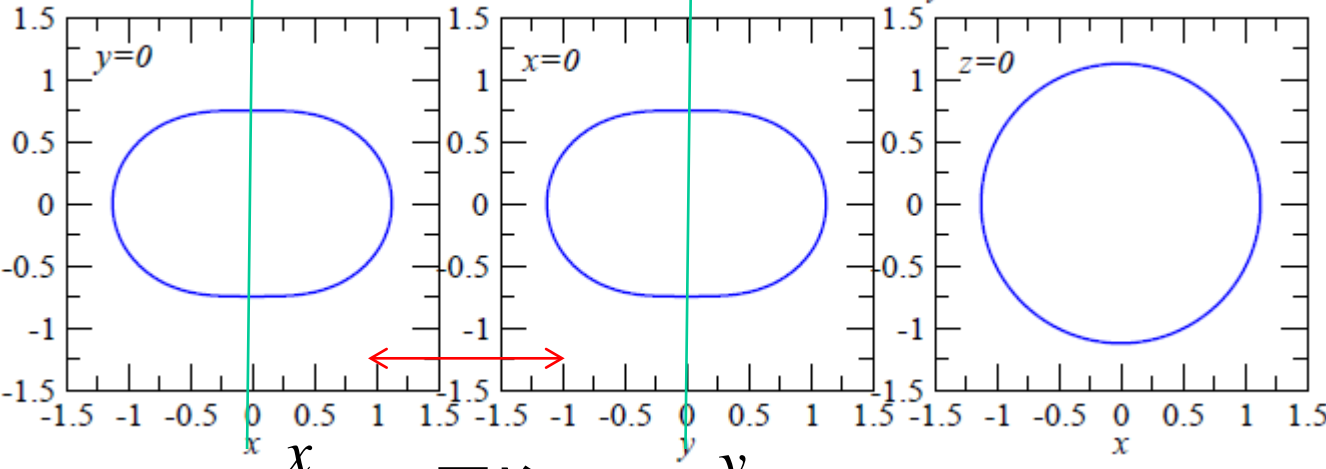
$\beta = 0.4$
 $\gamma = 0$
 プロレート
 変形



$\beta = 0$
 (球形)



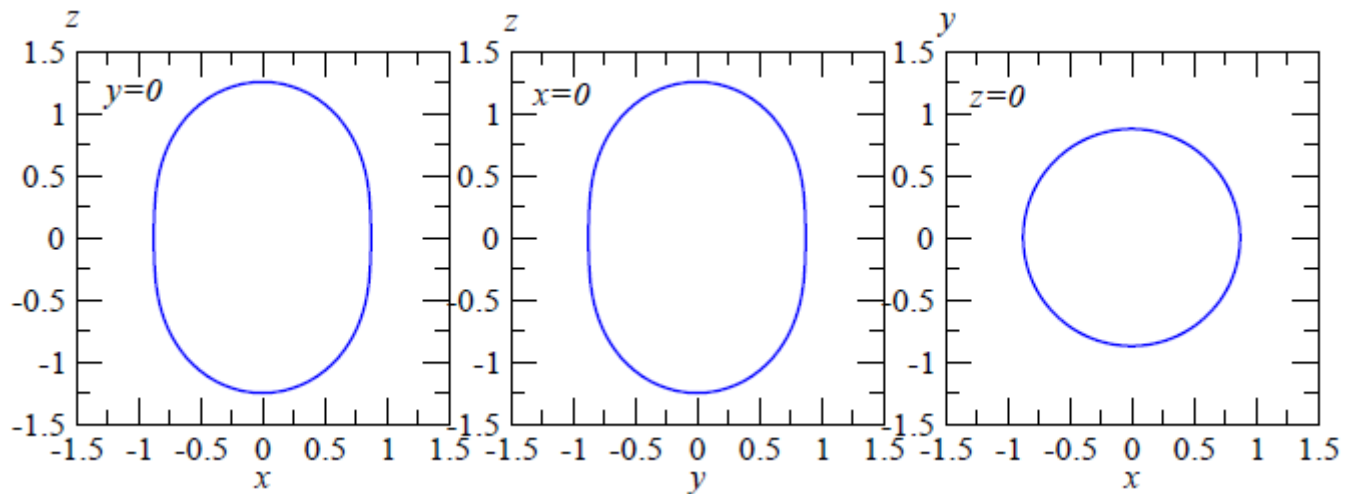
$\beta = -0.4$
 $\gamma = 0$
 オブレート
 変形



同じ

円 (軸対称)

$$\beta = 0.4$$
$$\gamma = 0$$




三軸非対称
(どの平面で
切っても円に
ならない)

$$\beta \neq 0$$

$$\gamma \neq 0$$



変形ポテンシャル中の一粒子運動


$$V(\mathbf{r}) \sim \int v(\mathbf{r}, \mathbf{r}') \rho(\mathbf{r}') d\mathbf{r}' \sim -g\rho(\mathbf{r}) \quad \text{if } v(\mathbf{r}, \mathbf{r}') = -g\delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}')$$

密度分布が変形すると、平均場ポテンシャルも同じように変形

$$V(r, \theta) \sim V_0(r) + \beta V_2(r) Y_{20}(\theta)$$

(ポテンシャルも四重極変形しているとする)

ポテンシャルが回転対称性を持たない

—————> 角運動量がいい量子数にならない
(保存しない)

■ Y_{20} の項の効果を1次の摂動論を用いて考察してみよう

(復習) 1次の摂動論

$$H = H_0 + H_1$$

H_0 の固有値、固有状態がわかっているとすると:

$$H_0 |\phi_n^{(0)}\rangle = E_n^{(0)} |\phi_n^{(0)}\rangle$$

H_1 があることによって、固有値、固有関数は次のように変化する:

$$E_n = E_n^{(0)} + \langle \phi_n^{(0)} | H_1 | \phi_n^{(0)} \rangle + \dots$$

$$|\phi_n\rangle = |\phi_n^{(0)}\rangle + \sum_{m \neq n} \frac{\langle \phi_m^{(0)} | H_1 | \phi_n^{(0)} \rangle}{E_n^{(0)} - E_m^{(0)}} |\phi_m^{(0)}\rangle + \dots$$

変形ポテンシャル中の一粒子運動

変形ポテンシャル

$$V(r, \theta) \sim V_0(r) + \beta V_2(r) Y_{20}(\theta)$$

■ Y_{20} の項の効果をもつて1次の摂動論を用いて考察してみよう

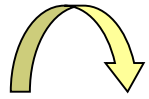
$\beta=0$ (球形ポテンシャル) の時の固有関数: $\psi_{nlK}(\mathbf{r}) = R_{nl}(r) Y_{lK}(\hat{\mathbf{r}})$
固有値: E_{nl} (K には依存しない)

エネルギーの変化分:

$$\begin{aligned} E_{nl} &\rightarrow E_{nl} + \langle \psi_{nlK} | \Delta V | \psi_{nlK} \rangle \\ &= E_{nl} + \beta \underbrace{\left[\int_0^\infty r^2 dr V_2(r) (R_{nl}(r))^2 \right]}_{V_2(r) < 0 \text{ であれば} \\ &\quad \text{負の量}} \cdot \underbrace{\langle Y_{lK} | Y_{20} | Y_{lK} \rangle}_{\text{\textcircled{R}} \\ &\quad -(3K^2 - l(l+1))} \end{aligned}$$

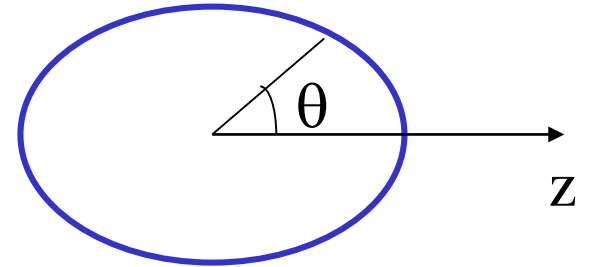
(note) 変形 Woods-Saxon ポテンシャル

軸対称な回転楕円体の半径: $R(\theta) = R_0(1 + \beta Y_{20}(\theta))$



Woods-Saxon ポテンシャル

$$V(r) = -\frac{V_0}{1 + \exp((r - R_0)/a)}$$



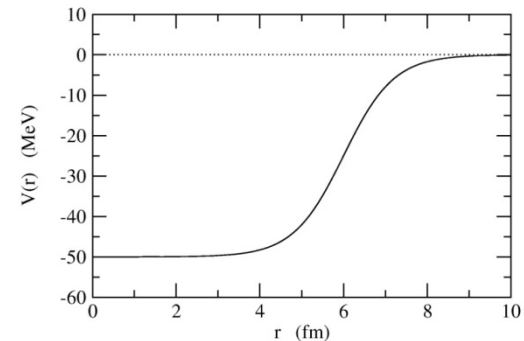
の半径 R_0 を $R(\theta)$ に変えると

$$V(r, \theta) = -\frac{V_0}{1 + \exp((r - R_0 - R_0\beta Y_{20}(\theta))/a)}$$
$$\sim V_0(r) - \beta R_0 \frac{dV_0}{dr} Y_{20}(\theta) + \dots$$



$$V_2(r) = -R_0 \frac{dV_0(r)}{dr} < 0$$

($V_0(r)$ は r の増加関数なので)



変形ポテンシャル中の一粒子運動

変形Woods-Saxon ポテンシャル

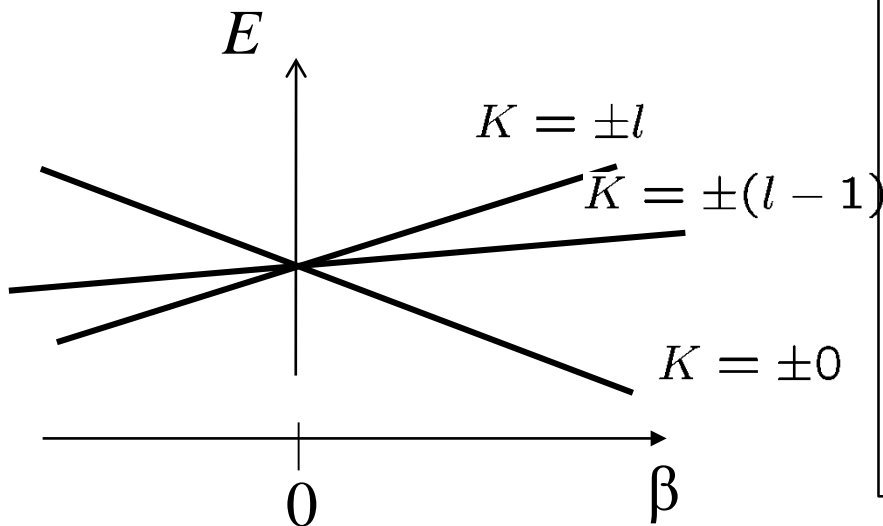
$$\psi_{nlK}(r) = R_{nl}(r)Y_{lK}(\hat{r})$$

$$V(r, \theta) \sim V_0(r) + \beta V_2(r) Y_{20}(\theta)$$

■ Y_{20} の項の効果を一次の摂動論を用いて考察してみよう

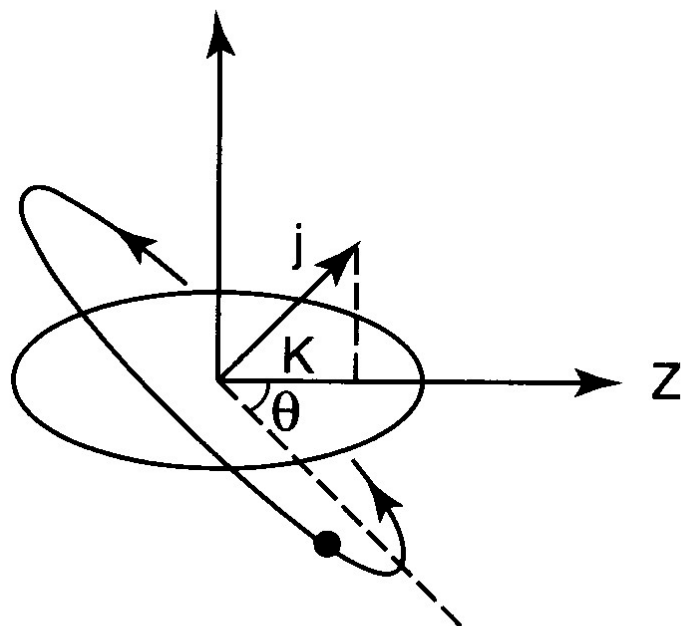
エネルギーの変化分:

$$E_{nl} \rightarrow E_{nl} + \alpha_{nl} \beta (3K^2 - l(l+1)) \quad (\alpha_{nl} > 0)$$

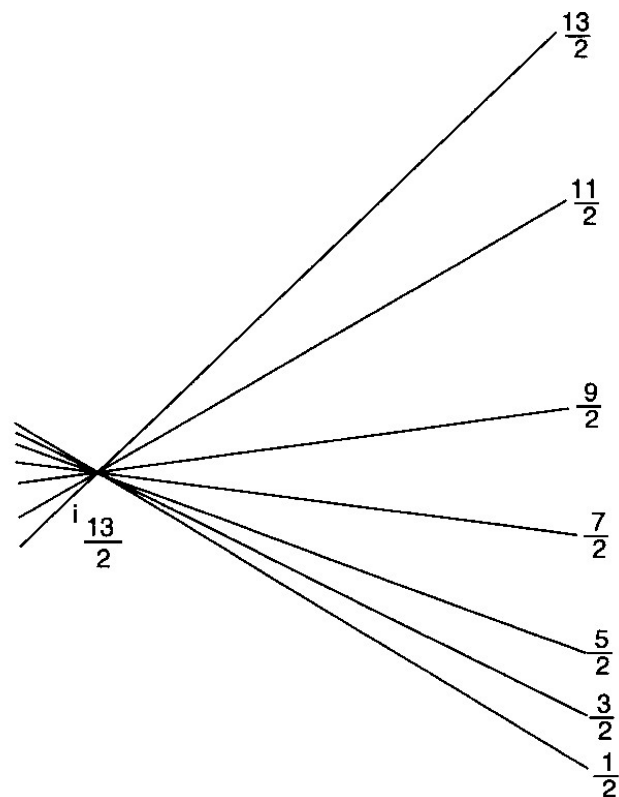


- ✓ K ごとにエネルギー変化が異なる (縮退が解ける)
- ✓ $\beta > 0$ では K が小さいほどエネルギーが低くなる。
- ✓ $\beta < 0$ ではその逆
- ✓ K と $-K$ は縮退する

幾何学的解釈



$$\sin \theta \sim K / j$$



- K は角運動量ベクトルの z 軸への射影
- 核子の軌道は角運動量ベクトルに垂直な平面内
- プロレート変形の場合、小さな K ほど長軸に沿って運動。
→ 従ってより引力を感じてエネルギーが下がる。
- 大きな K は短軸に沿って運動し、エネルギーを損する。

変形ポテンシャル中の一粒子運動

$$V(r, \theta) \sim V_0(r) + \beta V_2(r) Y_{20}(\theta)$$

■ Y_{20} の項の効果を1次の摂動論を用いて考察してみよう

次に波動関数の変化分: $|\phi_n\rangle = |\phi_n^{(0)}\rangle + \sum_{m \neq n} \frac{\langle \phi_m^{(0)} | H_1 | \phi_n^{(0)} \rangle}{E_n^{(0)} - E_m^{(0)}} |\phi_m^{(0)}\rangle + \dots$

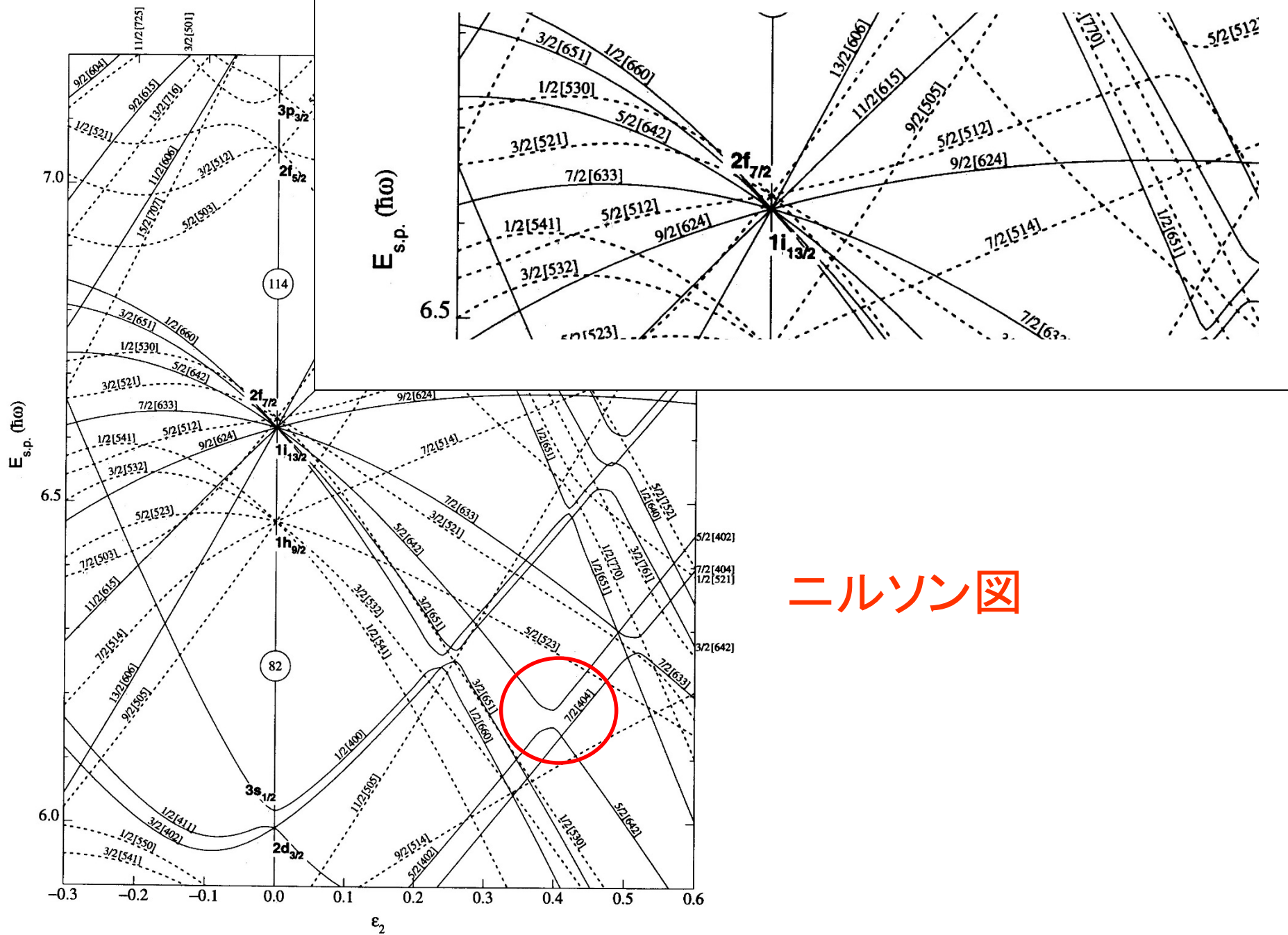
$\beta=0$ (球形ポテンシャル) の時の固有関数: $\psi_{nlK}(\mathbf{r}) = R_{nl}(r) Y_{lK}(\hat{\mathbf{r}})$

$$\psi_{nlK} \rightarrow \psi_{nlK} + \sum_{n'l'K'} \frac{\langle \psi_{n'l'K'} | \Delta V | \psi_{nlK} \rangle}{E_{nl} - E_{n'l'}} \psi_{n'l'K'}$$



$\langle Y_{l'K'} | Y_{20} | Y_{lK} \rangle$ でつながる状態が波動関数に混ざる

- l は保存せず、様々な l が波動関数に混ざる
- 軸対称変形 (Y_{20}) の場合、 K は変化しない ($K' = K$)
すなわち保存量
- Y_{20} はパリティを変えない。従って、パリティも保存量。



ニルソン図

Figure 13. Nilsson diagram for protons, $Z \geq 82$ ($\epsilon_4 = \epsilon_2^2/6$).

準位交差の問題: 同じ量子数を持つ2つの状態は交差しない

「ノイマン - ウィグナーの定理」

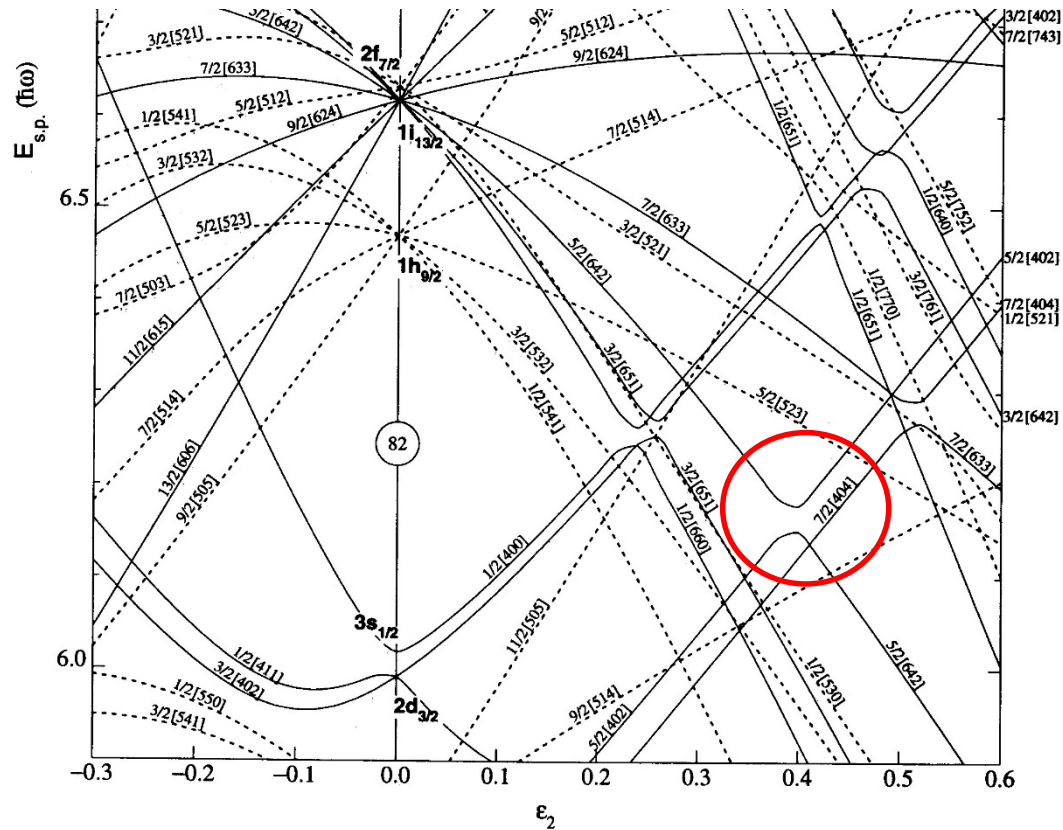
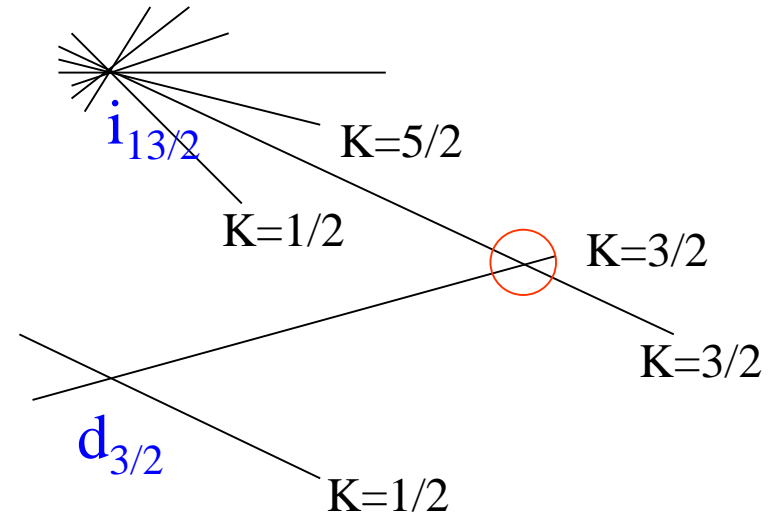


Figure 13. Nilsson diagram for protons, $Z \geq 82$ ($\epsilon_4 = \epsilon_2^2/6$).

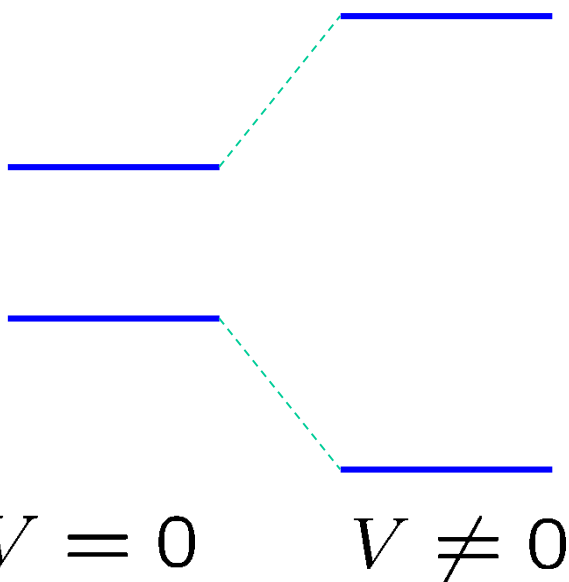


準位交差の問題: 同じ量子数を持つ2つの状態は交差しない

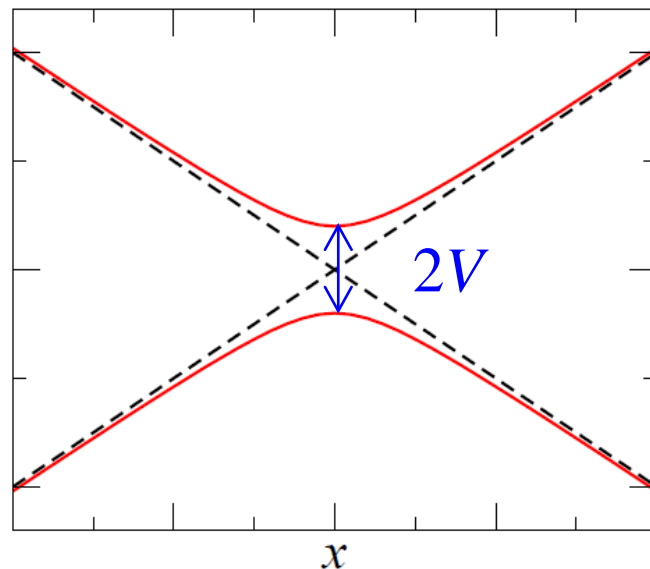
「ノイマン - ウィグナーの定理」

$$\begin{pmatrix} -\epsilon x & V \\ V & \epsilon x \end{pmatrix}$$

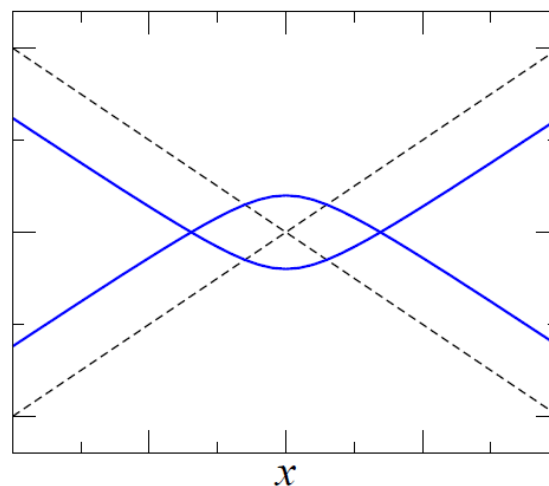
対角化 $\rightarrow \lambda_{\pm}(x) = \pm \sqrt{\epsilon^2 x^2 + V^2}$



V の符号によらず必ず反発



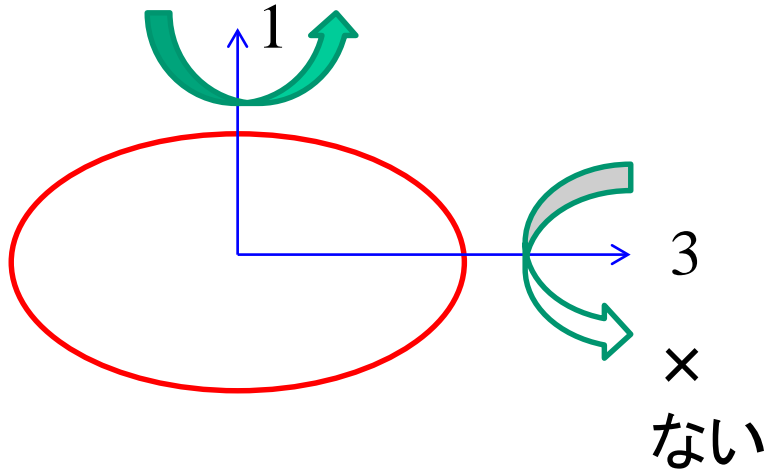
「疑似交差」、「準位反発」



このようになることはない

軸対称変形核の回転運動

軸対称変形核を考える



量子力学的には対称
軸周りの回転は存在
しない

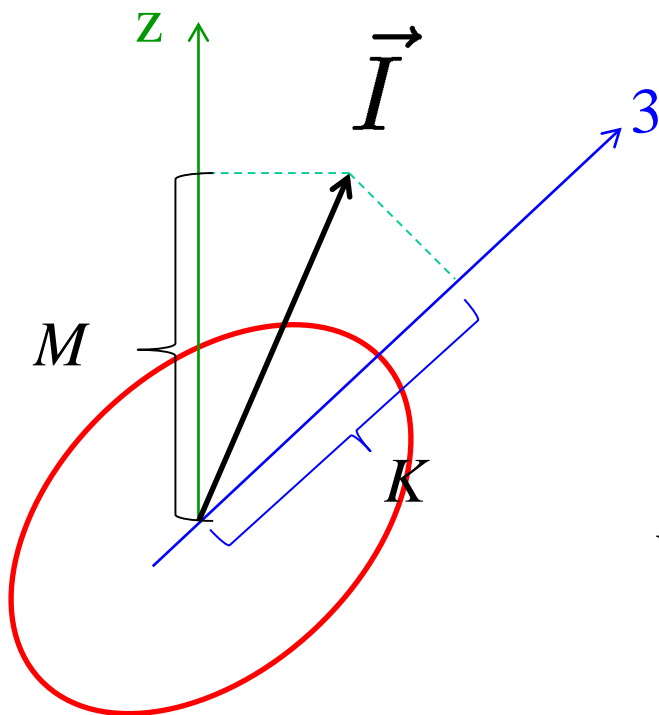
$$T_{\text{rot}} = \frac{1}{2} \mathcal{J} (\omega_1^2 + \omega_2^2) \rightarrow \frac{I_1^2 + I_2^2}{2\mathcal{J}} = \frac{I^2 - I_3^2}{2\mathcal{J}}$$

(軸対称なので
 $J_1 = J_2$)

量子化

$$T_{\text{rot}} = \frac{I_1^2 + I_2^2}{2\mathcal{J}} = \frac{I^2 - I_3^2}{2\mathcal{J}}$$

固有状態は I , $I_z (=M)$, $I_3 (=K)$ の同時固有状態



$$|IMK\rangle = \sqrt{\frac{2I+1}{8\pi^2}} D_{MK}^I(\Omega)$$

Wigner の D 関数

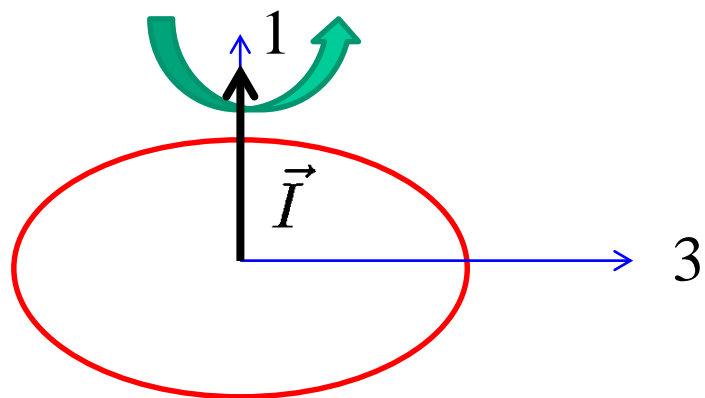
$$D_{MK}^I(\Omega) \equiv \langle IM | \hat{\mathcal{R}}(\Omega) | IK \rangle$$



回転の演算子

$K=0$ のとき $D_{MK=0}^I(\Omega) = \sqrt{\frac{4\pi}{2I+1}} Y_{IM}^*$

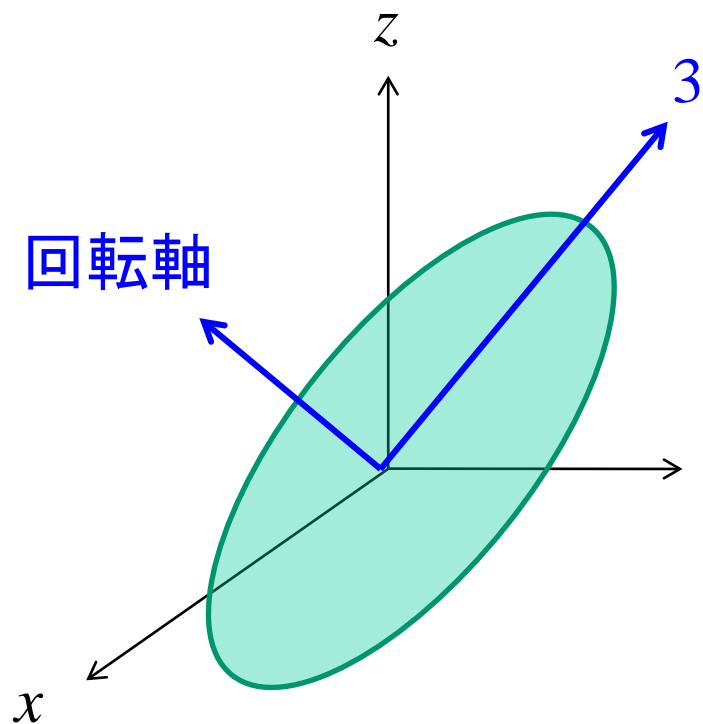
$K = 0$ のとき



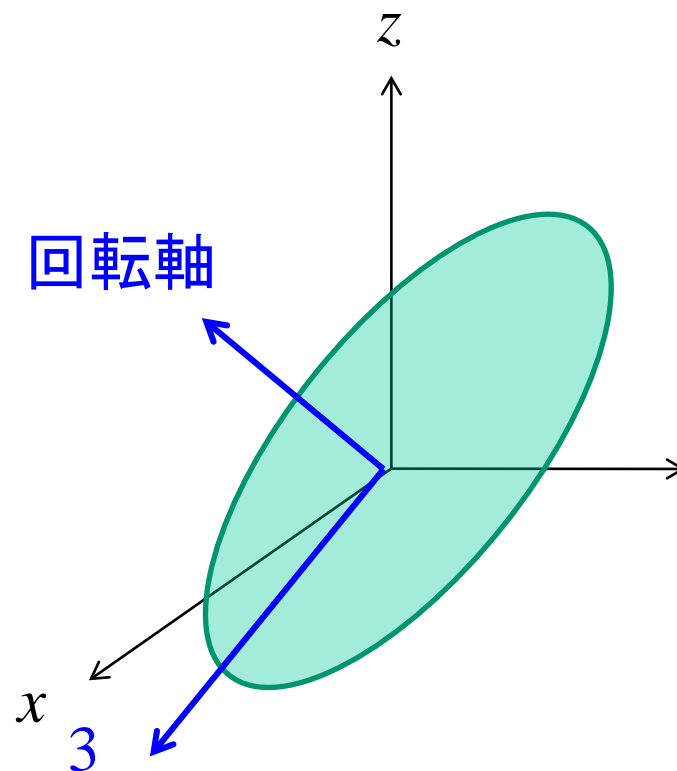
対称軸に垂直な軸のまわりの回転

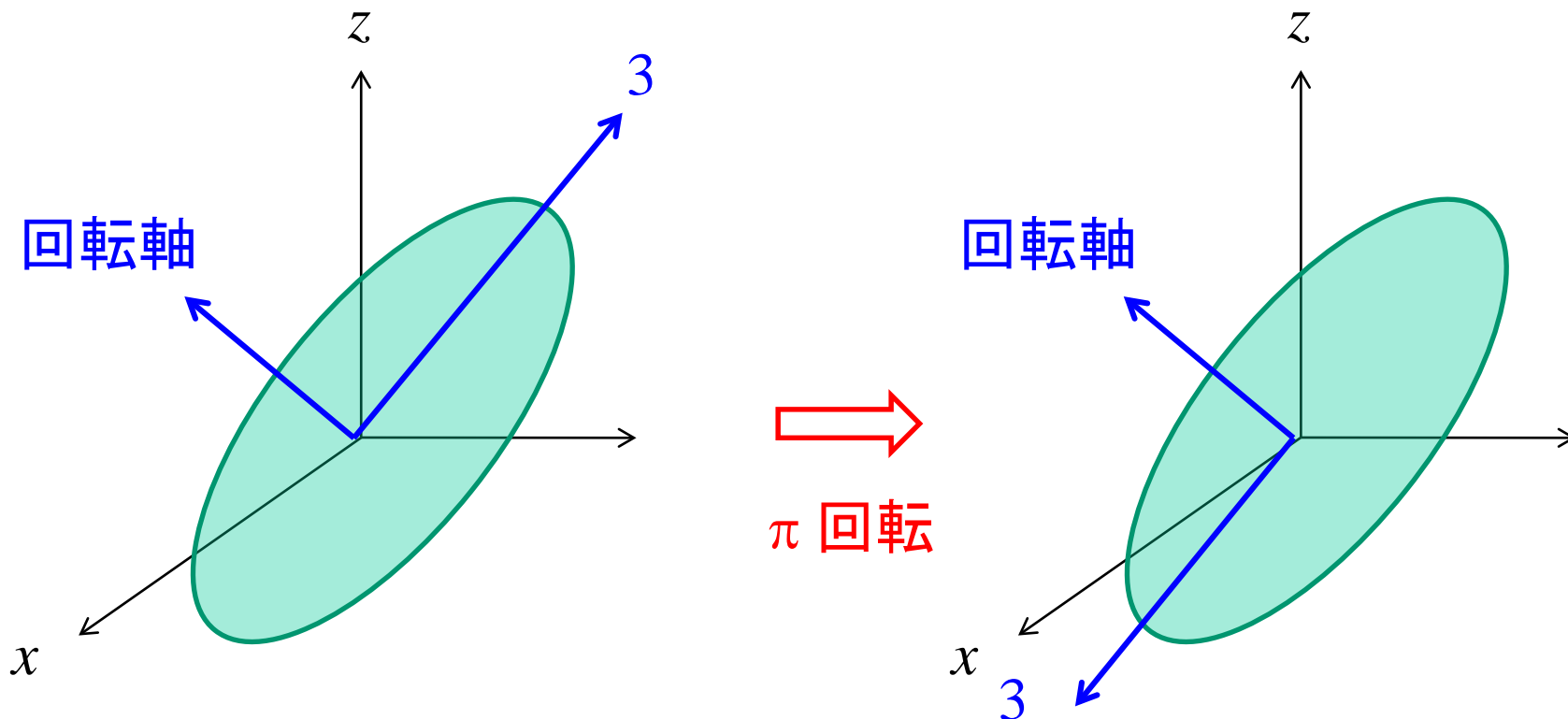
π 回転に対して対称

→ 偶数角運動量のみが現れる



→
 π 回転



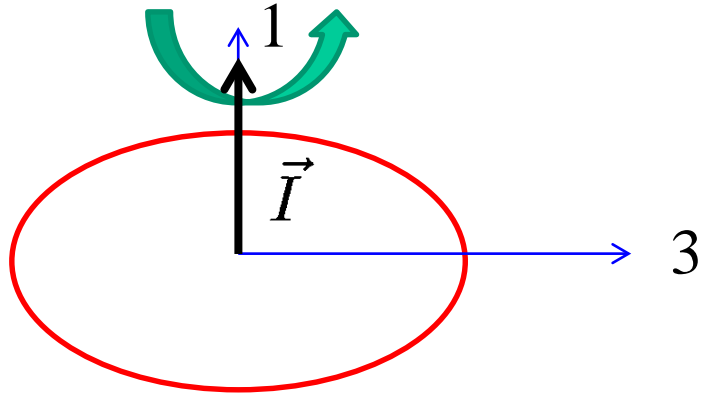


これは空間反転(パリティ変換)と同じ

$$Y_{IM}(\hat{r}) \rightarrow Y_{IM}(-\hat{r}) = (-)^I Y_{IM}(\hat{r})$$

波動関数が変わらないためには I は偶数(偶パリティ状態の場合)

K = 0 のとき



対称軸に垂直な軸のまわりの回転

π 回転に対して対称

→ 偶数角運動量のみが現れる

0.903 ————— 8⁺
(MeV)

0.544 ————— 6⁺

0.267 ————— 4⁺

0.082 ————— 2⁺

0 ————— 0⁺

¹⁵⁴Sm

¹⁵⁴Sm の励起スペクトル